

ヘブル思想における

パティキュラリズムとユニヴァーサルリズム

―ユダヤ的思考方法

(ユダヤ思想の研究 No. 12)

森 三十郎

一、序説

(一) 方法論的欠陥

(二) 弁証法的思考方法の欠如

(三) 中庸を缺く反社会的思考方法

二、パティキュラリズムとユニヴァーサルリズム

(一) 特殊主義と普遍主義

― Partikularismus und Universalismus (その一)

(イ) モーセの一神教の場合

― ヤハウェイズム Jahweismus

(ロ) イエスのメシア教の場合

(ハ) マルクスの唯物論的一神教の場合

(ニ) ゲオルグ・エリネック及びハンス・ケルゼンの「一般国家学」におけるヘブル的特殊の普遍化

(二) 個人主義と世界主義

— Partikularismus und Universalismus (その二)

- (イ) モーセの一神教の場合
- (ロ) イエスのメシア教の場合
- (ハ) マルクスの唯物論的一神教の場合
- (ニ) ツイオンの賢者達の議定書に就て
- (三) 分立主義と統一主義

— Partikularismus und Universalismus (その三)

- (イ) 分立主義・宗派主義
 - a、アアロンの黄金の贖の伝承 b、分立・割據・内訌・叛乱の歴史 c、批判と闘争の宗教—宗教戦争の歴史
- (ロ) 一元論的統一主義
 - a、自然主義的ユニヴァーサルイズム b、一神教的ユニヴァーサルイズム

一、序説

ユダヤ人はパティキュラリスト (Partikularist) かユニヴァーサリスト (Universalist) か? という問題がある。それがユダヤ人の一般的思想傾向を問題にしていることは、云う迄もない。具体的に云えば、イエス・クリスト (Jesus Christ → Messiah, Messiah) Ⅱメシア: イエス) は、パティキュラリストかそれともユニヴァーサリストか?、或は又カール・マルクスはパティキュラリストかユニヴァーサリストか? と云う問題である。我々の國家学・憲法学の領域では著名なゲオルグ・イエリネック (Georg Jellinek 1851 ~ 1911) に就てはどうか? 彼はドイツ・ユダヤ人であるが、彼の著書、

「一般國家学」Allgemeine Staatslehre 1900）は果して「一般的」と云えるかどうか、そこにはヘブル的特殊の一般化（普遍化）が在りはしないか、ハンス・ケルゼンの「一般國家学」に就てはどうか？——概ねこのような問題である。然し西洋語が一般的にそうであるように、このパティキュリズム及びその反対概念としてのユニヴァーサルイズムと云う言葉も、一義的ではなくて多義的概念（vieldeutige Begriff）であるから、あらかじめその意味を明らかにし整理して置かねばならない。

先ずパティキュリズム（Partikularismus）に就て見るに、その語源は拉典語のパート或はパルティス Part, Partis（一部分）に由來するパティキュリス Particularis であることが分る。

従つてパティキュリズムと云えば、それは事物（人・物・事）に就き其の一部分、個々のなものに対する関心を意味している。それ故、それは部分主義、個別主義、分立主義、割據主義、宗派主義、派閥主義（セクト主義）と云つた種々の意味を有していることが分る。

それでは、こういう多義的なパティキュリズムに対する概念としてのユニヴァーサルイズムとは、どういう意味であるか？ ユニヴァーサル Universal（英・独）という言葉も、拉典語のユニス・ヴェルスス unis + versus（一つの性向）に基づくユニヴェルスス universus 又はユニヴァーサリス universalis に由來し、普遍主義（一般主義）、世界主義、統一主義又は一元主義と云つた種々の意味を有する。

特に宗教的・神学的の意味においてパティキュリズムと云う場合は、特定主義^{ていていしぎ}即ち、神の聖寵意思が予定者に限られていると云うことを意味するのに対して、ユニヴァーサルイズムと云う場合は、すべての人は究極的には救済されると云う普遍救済説を意味している。そうするとメシア *mässiah, messiah* 或はメシア王はその救済授福の使徒を意味してい

ることになる。

扱てパティキュリズムとユニヴァーサルリズムの意味内容は以上の通りであるとして、それらは、ヘブル思想Hebraismus又はユーデントゥム(Judenthum)の本質的特徴を成す極性Polarität志向の思惟の絶対主義、そしてその反社会的性向とどういうかゝわりが在るだろうか？ 單にかゝわりがある、深い関係があるどころの沙汰ではなく寧ろその本質的・反社会的性向を表明する「ユダヤ的思考方法 Jüdische Denkweise」として特徴付けられ得るものがある、ということに気付くのである。一体それはどういふ思考方法であるか？

西洋語の「方法」^{メトード} Methodeと云う言葉は、もとくギリシア語のメトードス methodes、^{メトード}ラ典語のメトードゥス methodusに由來し、それは「あるアイディアの秩序ある組織的な取扱ひ、(ordinary and systematic arrangements of ideas)」を意味する、と云われている。そうするとメトード(方法)と云うことは、自然現象であれ社会現象であれすべて認識対象に対する人間の精神的・理知的な、知慧又は叡知のはたらきの成果、云わば対象認識の眼を意味していよう。言語と科学、種々の發明や発見、理知的、精神的、創造的思惟の成果が対象認識のメトードを形成すると云えよう。そのメトードの集合物はこれを「文化」「文明」と云い得よう。そういう意味でのメトード(方法)の如何により、それに応じて認識対象は規定されるから、方法が対象を規定すると云うことができる。顕微鏡が發明される迄は、微生物は、認識できなかつたし、化学が發達する迄は、石油はアラブの黒い水であつただろう。自然現象も社会現象も認識主体の眼↓方法によつて規定され、それに応じてその姿を現わすのである。——然し、その反対に、対象が方法を規定すると云う命題も成り立ち得る。方法は対象に相応していなければならない。例えば顕微鏡で社会現象を觀察しても何も見えないし、國家のような歴史的な社会形成を望遠鏡で見ることとはできない。逆に法律学的方法や経済学的方法で、微生物や

天体を認識することはできない。従つて方法が対象を規定するかそれとも対象が方法を規定するかと云う問題に就て二者擇一的な答を出すことはできない。方法が対象を規定すると共に、対象が方法を規定すると云う他の反面があるのであつて、認識主体の方法と認識客体の対象とは、相互に規定し規定される關係にある。

「方法」(Methode)と云うことは、このような意味のものだと考えて、ヘブル思想(ユダヤ思想)に表明されている「ユダヤ的思考方法」なるものを考察すれば、次のような顕著な特徴を示しているように思われる。

(一) 方法論的欠陥

— 理念の秩序付けと組織化の欠陥^{けんけつ}

「理念」Ideeも確固たる実在である^ゝというカール・ロートベルツスの考え方は正しい。物質關聯的なもののみが実在ではない。例えば、家を建てる場合には、あらかじめ家の設計図が作成されるだろう。理念はそういう家の設計図のようなものであつて、その設計図によつて構築された物象(家)のみが実在であるのではない。その設計図、どういふ家を建てるかに就ての理念↓創造的思惟も亦、確固たる実在である。

ユダヤ的思考方法においては、この創造的思惟、人間の精神的、理知的作用において、著るしい特徴が見受けられるのであつて、それはどういふことかと云えば、秩序付け(Ordnung)と組織法(Systematik)に缺けているということである。整序されたコスモス(Kosmos)ではなくて、整序されていない雑多—カオス(Kaos)を内容とする極性志向の一元論的統一ということが看取され得る。このような思考方法は、すでにモーセの律法(トーラ Tora のハラカ Halakot)に、明らかに表明されているのであつて、そのことはすでに指摘して置いた。(ヘブル法の特徴付けに就

ての批判的考察、福岡大学法学論叢、第四十七巻、第一号、平成十四年、六月）又、その点はカール・マルクスの『唯物論一神教』にも現われているのであって、その『科学的部分』は、剰余価値の『理論』ぐらいのものであり、歴史観、國家観（広く社会観）においては整序された思想体系を形成していない。理知の光を當てれば、雪だるまのように崩れ落ちる。

要するに、幾多の不合理、背理、矛盾を含む片面的、独断的、主観的な思惟の絶対主義が聳り立っており、その思想内容には科学的、哲学的根拠が乏しい。

(二) 弁証法的思考方法の缺如

— 正（テーゼ）と反（アンティテーゼ）があつて、合（シンテーゼ）が無い

次に指摘され得ることは、ユダヤ的思考方法には、ヘラクレイトス流の弁証法的思考方法が缺けているということである。テーゼ (These) とアンティテーゼ (Anti-thesē) — その何れもが極性 (Polarität) を志向して聳り立っている — が在つて、それらを止揚又は揚棄 (aufheben) するシンテーゼ (Synthesē) に缺けている。例えば、カール・マルクスの唯物弁証法はヘーゲル弁証法の唯物論的模倣であつて、物質的生産力（テーゼ）と生産諸関係（アンティテーゼ）との矛盾を止揚するより高次の生産手段の社会的所有と云うことは、要するに前述した認識主体の理知、叡知、精神の創造性と云うことを除外した唯物主義的思考形式であり、自然弁証法ということになるが、自然界には、自然法則（因果必然の法則）が在るのみであつて、人間の社会における弁証法的な思考形式は通用しない。それはまさしく敵の刃（やいば）を奪つて敵を勅す批判と闘争の唯物論的一神教の武器以上の、何らの意味内容を有しない空理空論であつたに過ぎない。

弁証法の研究において、マルクスはフェルジナンド・ラサールの足元にも及ばない。

弁証法の始祖は、ヘーゲル自身が告白している通り、古代ギリシア哲学の最高峰ヘラクレイトス Herakleitos B. C. 500?であり、それを継承したのが、著名なドイツの哲学者ヘーゲル (G. W. Friedrich Hegel 1770-1831) であつて、マルクスと異なりヘーゲリアンにとどまったラサールが、青春の情熱を傾けて研究した成果が、『エフェソスの暗闘ヘラクレイトスの哲学』と云う大著である。(Ferdinand Lassalle, Gesammelte Reden und Schriften. Herausg. und eingeleitet von Eduard Bernstein. 7Band (S.593) 8Band. (S.718) Die Philosophie Herakleitos des Dunklen von Ephesos. Verlag bei Paul Cassirer, Berlin 1920. — 実に千三百頁に及ぶ力作である。和訳はない。尚、H. Diels, Fragmente der Vorsokratiker, 1952 田中美智太郎訳 ヘラクレイトス断片、弘文堂アテネ文庫、弘文堂昭和二十三年)

ヘラクレイトスが豎琴とリラの弓の例を引いて述べている反撥的調和、矛盾の均衡という弁証法的思考方法、或は『登り道と降り道』と云う言葉で表現している弁証法的思考の方法は、ユダヤ的思考方法には缺けている、と云つてよからう。

(三) 中庸を缺く反社会的な思考方法

— 主観主義・個人主義、反中心主義

更に、ユダヤ的思考方法は、主観的であつて客観的ではなく、云わば自己中心主義で社会的には反中心主義 (Anti-Zentralismus) 的性向が強いということが指摘され得るのであつて、社会的、共同的なもの、欠落と云う性向が看取

され得る。磁石の針が南北を指し、時計の振りが左右に揺れるように、人が右と云えば左と云う所謂天邪鬼的な思考方法が見受けられる。

周知の通り、儒教においては、「中庸は徳の至れるものなり」（孔子）と云われているが、ギリシアの古典哲学においても、「中庸の美德」（アリストテレス、國制論において）が説かれている。然しユダヤ的思考方法は、ツェントリズム（Zentralismus）に缺け、反ツェントリズムの性向が強いことである。凡そ、コムユニズムとかコンミニタリニズム（Kommunismus, Communitarianism）或はゲマインシャフト（Gemeinschaft）的な思考方法に乏しいと云うことが指摘され得る。國家を持たなかつたヘブル人、そして國家、公けの共同体を失つたユダヤ人に特有な歴史的特殊が、右に畧述したユダヤ的思考方法として現われているように思われる。

二、パティキュラリズムとユニヴァーサルイズム

(一) 特殊主義と普遍主義

— Partikularismus und Universalismus (其の一)

世界の人民又は民族の中で、ヘブル人（↓ユダヤ人）ぐらい極端な特殊主義と普遍主義とが結合してワンセットになり、セントリズム（Zentralismus）（中心主義・中央主義）とでも云うべきものを缺いている思想の持主は居ない。平たく云えば右翼と左翼があつて中央、中堅が無い。このヘブル思想に特有な思考方法は、モーセのヤハウエイズム（Jahaweismus）に見出されるし、イエスのメシア教に見受けられるし、マルクスの唯物論的一神教にも見出される。それは

我々の國家学の領域においても見受けられるのであって、ゲオルグ・エリネック Georg Jellinek 及びハンス・ケルゼン Hans Kelsen の「一般國家学」(Allgemeine Staatslehre)においても、「ヘブルの特殊の普遍化」という形跡が看取される。

(イ) モーセの一神教

— ヤハウェイズム Jahweismus

周知の通りヘブライズムの源泉は、モーセの思想にあり、パティキュリズムとユニヴァーサルイズムとの不可分の結合、「特殊の普遍化」がそこに見出される。

モーセのヤハウェイズム↓一神教・單神主義 (Monotheismus) ↓一元論的な宗教的世界観↓宗教的絶対主義が、極めて例外的な存在であったことは言う迄もない。古代地中海文明の諸国、エジプトとバビロニアを始めとして、ペルシア、ギリシア、ローマ等の古代國家群においても、多神教・汎神主義 (Kosmotheismus) であったからである。北方のノルマン人やゲルマン人においても、後にイエスの宗教に思想的に征服される迄は、多神教・汎神主義であったし、古代東洋の支那、印度、日本等の古代國家群においてもそうであった。太陽や吹き荒れる嵐、建国の父を初めとする民族のヒーロー達は、すべて「上」↓「神」として畏敬し、尊敬し、それこそ万物に神霊を見る日本人の多神教・汎神主義は、ヘブル人の一神教・單神主義とは、全く宗教的世界観の相反・対立する兩極を成していたと云つてよい。

モーセの宗教的世界観は、「初めに一なる神ありき」から始まっている。そこには自然現象及び社会現象を客觀的に見る「眼」が無い。シナイの曠野、岩山の砂漠に見るべき何物が在っただろう。又、見る余裕すらなかっただろう。國家

という公けの共同体を持った経験のない幕舎の遊牧民を団結させて聖き祭司の國（僧政制の部族聯合國家）をカナンの地（現在のパレスチナ地方）に建設するためにはどうしたらよいか、と思う心で一杯であつて、そういう心から一神教が生れたと見てよからう。もとくシナイの曠野の遊牧民の神ヤハウェを、ヘブルの神、そして人類の神、万物の創造者としての神に祭り上げたのは、モーセのそういう心に出ずるものであり、彼の耳には神の声のみがきこえて來た。耳は眼と異なり空間的感覺ではなくて時間感覺である。そのことは何を意味するかと云えば、物の觀方が主觀的であつて客觀的ではないことを意味する。最高絶対唯一の造物主としての神、全人類の神、そしてヘブル人の神と云うのは、そういう主觀主義 Subjektivismus の產物であり、抽象的、觀念論的な思惟の絶対主義から生じたものである。多神教・汎神主義が神話 Mythos であるとすれば、此のヘブル特有の一神教・單神主義も神話であつて、別に科學的な根拠があるわけではない。後者を合理的であるとして前者を不合理であるとする考え方も、根拠は無い。合理性と云う点では、前者の方がナチュラルであつて後者の方が不自然である。矛盾や背理、秩序付け及び組織化に缺けているという点では、後者の方が甚だしい。その点も既に説明して置いたから、これ以上反復しない。（ユダヤ人嫌忌・迫害とユーデンツームの反社会的性向、福岡大学法学論叢、第四十七卷第二号）

要するにモーセの一神教・單神主義は、理念 (Idee) であり觀念 (Vorstellung) であり、思想であり、空想であつたわけである。しかしそれが、地上の國（現實國家）の政治的、國家的実践に恐るべき影響を与えたことは周知の通りである。それは奴隷出自の遊牧民に國家をもたらししたし、バビロンの捕囚以後の亡国の人民にとつては、唯一の精神的輻帶となり、民族的殘存の奇蹟をもたらしした宗教的、民族的主義として今日尚続いている。このモーセの一神教・單神主義は、一面において「ヘブル人の神」と云う点において、ヘブル的特殊主義 (Partikularismus) を表明し、他面において造物

主としての神と云う点において、普遍主義、普遍的人類主義 (Universalismus) を表明している。

一なる神の支配 (Theo + kratie) ↓ 神主制又神政制 (Theokratie) 、神法又は神授法 Jus Divino の支配そしてユス Jus (人定法) のファス (Jus) (神のおきて↓神法) 化と云う思想は、まさしくヘブル古法の「特殊」であつて、バビロニアのハムムラビ王の勅法にはないし、日本固有法にも無い。後者にはユスのファス化はなく、現神王(バビロニア)或は現人神(日本)としての神皇の勅法即ち神法であり、従つてヘブルの場合のように人が神から授けられた神授法という思想も無ければ、ユスをファスとして通用せしめようという作為も無い。又、ヘブル思想における神國、神君の支配は、主觀的イデオロギーであつたのに対し、バビロニアや日本の神國、神皇統治は、實在國家に就てのことであり、現実性 (Realität) があつたのであつて、單なる抽象的觀念ではない。神の觀念が違ふし、君主尊崇の念がヘブルの場合は極めて希薄であつたのに反し、バビロニアや日本の場合は、極めて強固であつたのである。

支配する神は一なるヤハウェと特定されているし、ヤハウェが永遠の真正の國君(神君)として支配する人民も亦、ヘブル人と特定されている。所謂「選民イスラエル」であり、その他の人民は、選民ヘブルを通じてのみ祝福されると云うわけである。又、現實の支配者であつた祭司、モーセ以後の士師、君主等は何れも神の思寵により民より選ばれたカリスマ的支配者であり、プリンケプス的存在として特定されている。所謂、油を灌がれ(又は塗油)されて(↓聖別されて)王となつた者であり、これまた特定されている。神の國の支配者も被支配者も特定されているし、神の下における人の國の支配者も神の思寵 (gottesgnadenhum) を受け聖別された特定のヘブル人とされている。この特定主義がヘブル思想に特有なパティキュリズムの現われであつたことは云う迄もない。

そのヘブル的特殊が普遍化されている。この特定されたヘブルの神が人類の神、万物の創造者としての神に祭り上げ

られている。ヘブル人の神として特定された一なる妬む神、唯我独尊、排他的な偏狭な神が何とすべての人、万人の神に祭り上げられている。ヤハウエは君主の上なる君主、すべてのおごりたかぶる者を眼下に見るモノスのモノス（唯一者中の唯一者）として桂冠されている。それが艱難と痛苦の被圧迫人民の下から上を睨み上げる「嫉妬」のあらわれであり、ヨブ記の怪獣リヴァイアサン (Leviathan) に相當することは、すでに指摘しておいた。(古代の神主制的民主制と現代の民主制的民主制との相似性・親近性、福岡大学法学論叢第四十七卷、第三・第四合併号、平成十五年三月)そこに、これまたヘブル的特殊の普遍化↓ユニヴァーサルイズムが表明されていることは、疑いない。

(ロ) イエスのメシア教

我が國において切支丹とか基督教と称せられて来たイエスの宗教は、すでに指摘した通り(キリストの語源はヘブル語のメシア (Mäsiāh, Messiah) である)、メシア教と云う意味であり、メシアと云う言葉には、此の世のものではなく彼岸の世界の(換言すれば未來天国の)王と云う意味があるから「メシア王」(Mälak Messias, König Messias)と云う意味を持っている。後世のバアル・コクバ (Bar Coehba) も高僧のアキバ・ベン・ヨセフ (Akiba ben Joseph) から「メシア王」と云われたが、ローマ帝制初期のイエスも亦、メシア王を以て自任していたのであって、そのことは、新約聖書、ヨハネ伝福音書において明らかである。バアル・コクバの場合は他稱であり尊称であつたが、イエスの場合は自称であり誇称であつた。

扨てこのイエスのメシア的王教がユダヤ教を母教とするその娘の宗教 (Tochter Religion) であつたことは云う迄もない。従つて次の諸点においてイエスの宗教は、モーセの宗教及びネヘミア、エスラによつて再建され、大宗教会議(ゲ

ローゼ・シノーデ GröÙe Synode)、その後身のギリシア、ローマ時代の最高評議会(シネードリオン Synedion サンヘドリン Sanhedrin)の祭司たち(サドカイ派)や保守派のパリサイ人に受け継がれたユダヤ教の思想を継承している次の通り。

a) 民祖アブラハム以来のメシア思想、その宗教的パティキュリズム(特定主義)を継承していること。即ち、イスラエル宗教史を貫く救済、授福の福音教と云う思想、そしてすべての人民はヘブル人を通じて祝福されるという思想は、イエスの宗教においても、明らかに見受けられるということ。

b) 次に、モーセの一神教・単神主義は、イエスのメシア教においても継承されていること。神名がヤハウェ(Jahwe)からエホヴァ(Jehova)に変わっているが、後者は前者の方言のようなもので、ヘブル人の神であると共に全人類の神である。モーセの一神教における特殊主義と普遍主義との結合は、イエスの宗教にも継承されている。そして一神教の排他・独善的な偏狭性は継承され多神教の場合のような宗教的寛容性に乏しい。所謂、ヘブルの「妬む神」の伝統は、イエスのメシア教にも受け継がれている。

c) 更に又ユダヤ教は被圧迫民族の批判と闘争の宗教であると云われて来たが、イエスの宗教も亦そういう性質を持つていたのであって、その点はイエスのパリサイ人に対する痛烈な批判やイエスの自分は平和の為にではなく戦わんが為に此の世に生れて来たのだと云うヨハネ伝福音書に書かれているイエスの言葉から見ても、争えない事実であろう。このような諸点から見て、イエスの宗教がモーセの宗教及びユダヤ教の精神的伝統を継承していることは疑いないのであって、そこにヘブル的特殊主義が表明されていることは疑いない。

然しながらイエスのメシア的王教には、モーセの宗教、ユダヤ教とは異なる反面が在ることは争えない事実であり、

そこには改革宗教の段階を越えた革命的宗教という性格が見受けられる。それはどういう点に見受けられるか？

(a) すでに指摘した通り、同じく一神教ではあるが、その一なる妬む神の性格がモーセの重牧軽農の神（アベルとカインの物語参照）から、重農軽牧の神に変化している。その点は、イエスが我が父は葡萄園の農夫であり、自分は葡萄の樹の幹であり、汝らはその枝であると云ったと云う伝承がこれを示している。

(b) 次にイエスの宗教は、モーセの宗教及びユダヤ教におけるヘブル人本位或は民族的宗教と云う政治的酵素が薄らいで宗教的酵素が強められ、比較的純粹な愛の宗教に変化していること。イエスに近い世代のユダヤ教の大祭司ヒレル（Hillel）の貧民に暖かい愛の宗教の影響を受けていると推定されるが、イエスの場合はヘブル人に特定された愛の宗教にとどまらず、云わば民族を超え国境を越えた隣人愛、そして普遍的な人類愛の宗教に変わっていったと云うこと。従って同病相憐れむの諺通り、ローマの最下層のプロレタリアウス（Proletarius）——最下層の貧民階級に括がり、次第にローマの上層階級を捉えて、ローマの公認教となり、その大版図に拡がったわけである。ウオーンテン又はオデインの神が象徴するゲルマン人、ノルマン人の素朴な力の宗教は、イエスの宗教に思想的に征服されたと云ってよい。

(イ) マルクスの唯物論的一神教

カール・マルクスは改宗者のユダヤ人弁護士の家になれたが、彼はヘブル思想（ユダヤ思想）の代表的思想家の一人であるので、これまでしばしば採り上げて批判を加えたが、彼の哲学（唯物論、唯物弁証法、唯物史観）及び科学（経済学、資本論、剰余価値の理論）で武装した思想体系に、モーセの一神教及びイエスのメシア教に見受けられた特殊主義と普遍主義との結合、センタリズム及びコミュニタリアニズム（Kommunitarianism）（共同主義）の欠缺、後述する通り天邪鬼的なユダヤ的思考方法が顕著に表明されていると云う思想史的事実を明確に認識し得ている者は、我

が国では全く居ないと云つてよいだろう。従つてこゝで私がマルクス主義に就て『唯物論的一神教 materialistische Monotheismus』と云つても、その意味が分らないだろうと思う。又、そこにイエスのメシア教と同様な『ヘブルの特殊の普遍化』が表明されていることを指摘しても、理解できないだろう。そこで反覆をいとわずマルクスの哲学、科学、歴史觀で武装した思想体系に就てその要点を採り上げて批判的考察を加えることにしよう。

マルクスは周知の通り『ユダヤ人問題を論ず』と云う若き日の小論文において、『神が人を造つたのではなく、人が神を造つたのである』と云つて、モーセ以来のヘブル特有の宗教的世界觀を真向から否定し、宗教は貧しい者の阿片 (Opium) と云い、レーニン (本名はウラジミール・イルイック・ウルヤノフ U. I. Ulianov) はそれを真似して宗教は『ジン』 (酒) と云つた。しかしその無神論的アンティテーゼの主張、批判にも拘らず、マルクス主義はモーセやイエスの一神教、一元論的な宗教的世界觀を繼承していた。神なき宗教、無神論的一神教を主張していたのである。

モーセの一なる妬む神ヤハウエ、イエスのエホヴァに相當するものは、マルクスの場合には『物質』であり『物質的な力』或は『物質的生産力』であつた。或はもつと具体的に勞働生産力と云う物神と云つてもよいだろう。このマルクスの物神も亦、『一なる妬む神』であつた。何とならば、物質的力 (materialistische kraft) に作用しそれを方向付けそれを増大せしめて来た人間の精神又は理知、創造的思惟のはたらき、換言すれば言語と科学の共同作用を全く疎外しているし、法や道徳のような意思、倫理的なはたらきの共同作用を全く除外しているからである。モーセの一なる妬む神ヤハウエは他の神々が自分と並び立つことを許さない排他的、独善的な神であつたが、マルクスの物質的力も、精神又は理知、意思又は倫理的な力がそれと並び立つことを許さない排他的、独善的な孤独の物神であつた。それ故、前述の通りマルクス主義は、ヘブルの一神教の唯物論的改訂版と云つて過言ではない。モーセの一神教が宗教的唯心論であつた

とすれば、マルクスの唯物論的一神教は哲学的唯物論であり、何れもユダヤ思想に特有な極性志向の一元論的世界観であるし、又、何れも抽象的、主観的イデオロギー（觀念形態）であつたという点において一致している。

要するにマルクスの哲学的唯物論なるものは、ヨハネス・アルトジウスやルソーと同様な自然論であつて、バイブルを通じてヘブル思想の影響を蒙つていたし、被圧民族の批判と闘争と福音の宗教と云う根源に到達する。要するにヘブルの奴隷の民出自の人民の嫉妬の哲学に到達するし、マルクスが大学の卒業論文において書いていた通り、ギリシアの自然哲学の影響が看取され得る。従つてマルクスはヘラクレイトス、クセノフォン、プラトーン、アリストテレスのようないギリシアの古典哲学の研究はしていないし、ヘーゲル哲学を翳りフォイエルバッバの哲学を模倣した程度のことである。マルクスは哲学を論争の武器に使つただけのことで、彼の唯物弁証法も敵の武器を奪つて相手を刺す道具に過ぎなかつたのである。

彼の唯物弁証法はヘーゲルの弁証法の唯物論的模倣にとどまり、彼はフェルジナンド・ラサールのように、ヘーゲル弁証法の始祖、深遠で難解の故にエフェソスの暗闇 (Das Dunkle von Ephesos) と云われたヘラクレイトスの哲学を全く研究していない。それ故、彼の唯物弁証法が自然論、自然弁証法に陥り、全く弁証法になつていないということには氣附いていない。自然の世界には、自然法則（因果律）が通用しそれは永劫の循環を続けているだけで、弁証法的発展の法則はそこでは通用しないということさえマルクスは知らなかつたのである。弁証法は人間の思惟に関する法則であり、歴史的により低次元の段階からより高次元の段階へ進歩・発展する社会法則に就てのことである。テーゼ（正）アンティテーゼ（反）、その対立・矛盾を止揚又は揚棄する (aufheben) より高次元の社会形成の論理学なのである。マルクスは其の論理学を模倣して敵を刺す武器として使用したわけである。この点もカール・ロートベルツがすでに看

破し指摘している。

従ってマルクスは、フェルジナンド・ラサールのように、ヘーゲル弁証法の始祖であるヘラクレイトスを研究したわけではなく、青年ヘーゲリアン *Junge Hegelian* としてヘーゲル哲学・弁証法を聞きかじり、單にそれを反資本主義、反ブルジョア論争の道具として利用したにとどまる。そこに批判と闘争の宗教と云われてきたユダヤ教の思想が顔を出している。マルクス自身はその点に氣附いていないし、彼の唯物弁証法が自然弁証法であり、従って弁証法になつていないと云うことに氣附いていない。ヘーゲル弁証法が逆立ちしていると知ったかぶりの批判をする當事者能力さえ欠いていたのである。

更に我々はマルクスの唯物史觀に就て検討して見よう。

ヘーゲルの歴史哲学は、思想を持つて歴史の考察に向い歴史は自由の發展行程と見たが、その自由は勿論社会、自由であつて、自然の自由ではなかつた。自然史においては因果必然の法則が支配しそこに自由の發展は無かつたからである。ヘーゲリアンでありヘーゲル哲学に謀叛^{むはん}を起したマルクスも、ヘーゲル流に思想を以て歴史に向い歴史は階級闘争の歴史であると云い、唯物史觀を表明した。然しマルクスは勿論歴史家ではなく經濟史に就ても何ら見るべき研究業績は無い。彼の唯物史觀に就て見るに、マルクス自身は思いも及ばなかつた事であろうが、旧約聖書の最初の五書↓モーセのトーラ (*Torat Mose*) に表明された定^{てい}命^{めい}的^{てき}な宗^{しゆ}教^{けう}的^{てき}歴史觀^{りきかん}と符^ふ節^{せつ}を合^あわ^あせ^せて^てい^いる^るこ^こが^が分^わる^る。この点^{てん}は、クリストファー・ドウソン (*Christopher Dawson*) オクスフォード大学教授が指摘しているが、私自身が調べて見たところでも彼の云う通りであつたことが判明した。トーラの定^{てい}命^{めい}的^{てき}な宗^{しゆ}教^{けう}的^{てき}歴史觀^{りきかん}に依れば、歴史は先驗的な神意、不可視のなる造物主としての神 (ヤハウェ) の見えざる手により、定^{てい}命^{めい}的^{てき}に方向付けられているのであつて、それを簡單な図式で表

現すれば、エデンの園(イスラエル幼かりしとき我彼を愛しぬ)↓地上の國(勞苦のキヴィタス・テラ)↓神の國(キヴィタス・デイ↓シャッダイの王國)と云うことになる。マルクスの唯物史觀を簡単な図式で表現すれば、原始共產社会↓階級國家↓無政府共產社会と云うことになる。旧約の定命的歴史觀は、マルクスの場合には哲学と科学に裏付けられた必然的な歴史觀とされている。然し一体これが歴史の名に値する歴史觀であろうか? 勿論答はノー(No)である。空想(Utopie)であり、ヘブル思想(ユダヤ思想)に特有なメシア的願望(Messianic Hope)、ユダヤ宗教文化史を貫く救済授福のメシア思想の表明に外ならない。モーセが神の國を指さし、イエスが天国を指さしたように、マルクスもいろいろな哲学、科学の借物を使って、現実に望みのない艱難と痛苦に満ちた被圧迫民族の未來天国の夢↓阿片 Opium(マルクスの言)或はジン酒(レーニン)を語っていたのである。マルクスも亦ヘブルの予言者たちの血をひいていたのである。宗教を阿片と称したマルクスが阿片(神なき宗教)を唯物史觀と称して売り出していたことが分るだろう。

最後に、マルクスの「科学的社會主義」を採り上げて見よう。そこで「科学的」と云うのはどういう意味であるか、又そこで「社會主義」と云うのはどういう意味であるか、その真相を明らかにしよう。

フリードリッヒ・エンゲルスが反デュリング論の中で空想的社會主義と科学的社會主義に就て語り、後にその部分をパンフレットとして出版したが(大内兵衛訳、岩波文庫を参照されよ)、その中で彼は唯物史觀と剰余價值説をマルクスの二大発見と称し、社會主義を空想から科学へ發展させたのはマルクスであると書いたが、前述の通り唯物史觀は空想であつたから、それを除外すると剰余價值説のみが残る。それはマルクスが発見したのか? 否——、剰余價值の存在を知っていたのは、エンゲルス自身も後に、資本論第二卷序文において書いている通り(彼はアダム・スミスもこれを知っていたと書いている)、マルクスのみではないしロートベルツのみでもない。英国のリカードオ派初期社會主義者たち

は誰でも知っていただろう。リカードオの労働価値説からすれば論理必然的に、剰余価値説が歸結されるからである。然しそこで重要なことは、誰が剰余価値を発見したかと云うことではなくて、誰が発見されていた剰余価値に就てそれを理論的に体系付けたかと云うことである。その点に就てはカール・ロートベルツであるとするのが学界の定説である。マルクスであると云うものは、エンゲルスの俗説ぐらいのものである。(日本のマル経学者はこの俗説を模倣)

ゲオルグ・アドラー(キール大学教授)が書いている通り、『ロートベルツと共に社会主義の歴史における新たな画期的時代が始まる』(Georg Adler, Robertus, der Begründer des Wissenschaftlichen Sozialismus, Leipzig Verlag von Duncker & Humboit 1884, s. 1.)の『ロートベルツ・リクエット non liquet』(明確ならず)という言葉が當嵌る従来の社会主義を剰余価値の理論(Rententheorie)で経済学的に定礎したのは、ロートベルツである。その代表的な文献は、一八四二年の経済学的著書『國家經濟の認識』もあるが、一八五一年の書簡形式の大論文、フォン・キルヒマン宛第三書簡、リカードオの地代論の反駁と新しい賃料理論の定礎『(Sociale Briefe an von Kirchmann. Von Robertus. Dritter Brief. Widerlegung der Ricardoschen Lehre von der Grundrente und Begründung einer neuer Rententheorie. Berlin. Allgemeine Deutsche Verlags-Anstalt 1851.その完訳としては、ロートベルツ著、森三十郎訳、フォン・キルトマン宛社会書簡—第三書簡、リカードオの地代論の反駁と新賃料理論の定礎、ベルリン、一八五一年、福岡大学法学論叢第二十六卷、第三・第四号、昭和五七、第二十七卷、第一号、第二号、第三号、第四号、昭和五七、昭和五八、第二十八卷、第一号、昭和五九があるだけである。)エンゲルスとマルクスがこれを読んでいたことは、エンゲルスのマルクス宛の書簡の中に、マルクスの完敗を告げる書簡が在ることから見て間違いない。ちなみにマルクスの資本論第一巻が出版されたのは、一八六七年のことであるから、一八五一年のロートベルツ

の第三書簡から約十六年の歳月が経過している。

その資本論第一巻を読んだロートベルツスは、親友のアドルフ・マイヤー宛書簡No. 68 (一八七一年七月) において、きびしい批判を加えており、資本家の剰余価値がどこから生ずるかは「本質的にはマルクスと同じであるが」甚だしい誤謬 (gewärtigen Irrtümer) があること、要するにマルクスの本は資本の研究と云うよりは現在の資本形態に対する論争 (Polemik) であって、社会への闖入 (der Einbruch von Marx in die Gesellschaft) と書いている。(詳細は拙著、ロートベルツスの社会主義の研究第一巻、森国家学研究所、平成三年二月十一日、二四二頁―二四八頁、マルクスの資本論に対する批判を参照されよ。)

その後、ロートベルツスはマイヤー宛書簡No. 69 (一八七一年十一月二十九日) において、もつときびしいマルクス批判即ち明らかに剰余価値説に関するものに就て、「シエツフルとマルクスが剽窃した」(Find Ich mich bei Schaffel und Marx geplündert) と書いている。名利に恬淡で学問的にはきびしい「誠実な人」(Mann des Herzs) の云うことであるから信憑性が強い。アドルフ・ワグナーの異論があるが、根拠が薄弱であり首肯できない。あの批判と論争好きのマルクスが―エンゲルスは勿論のこと―何らの反批判を為し得ていない。資本論第二巻序文におけるエンゲルスの反批判は、ロートベルツスの死後になつてからのことであり、詳細に点検して見たが、全く根拠がなく彼の無学と嘘を云う人柄を示している。

以上畧述した通り、マルクスの科学的社會主義において「科学的」と云われて来た唯一の部分も亦模倣であり剽窃であつたし、そこで「社會主義」と称されてきたものも、社會主義ではなく、反社會主義であつた。

マルクスの社會主義は、資本主義に対する觀念であるから寧ろ勞働主義と云うべきものである。資本に対する概念は

労働であり、資本利潤に対する概念は賃賃であるからである。そして彼の労働主義は、労働全取権、私有財産の公用収用（プロレタリアには財産はあまり無いからブルジョアジの私有財産の没収になる）、プロレタリア革命（暴力革命）、プロレタリア独裁、そして無政府共産社会の必然的到來を以て終る。この一聯の徹底的労働主義は何を意味しているか？それは労働の、一神教を意味している。物質、物質的生産力という物神は、更にパティキュライズされ又ユニヴァーサライズされて、労働の神格化―ヘブルの妬む神やハウエの地位に祭り上げられている。これと並び立つことを許さない排他、独善、孤独のロビンソン・クルーソーの神になっている。そこには結合がなく共同作用がない。ロートベルツスの場合と較べれば、アダム・スミス、リカードオの労働價值説を發展させそこから剰余價值の理論（搾取理論）に到達したところまでは共通しているが、そこから道は二つに岐れて、ロートベルツスの場合、ギリシア的思考形式↓多様の統一、弁証法的矛盾の均衡、反撥的調和になつて居るが、マルクスの場合、一面的・独断的ドグマ（教理）、極端に―なるものを追求するユダヤ的思考方法に陥っている。

労働観が初めからロートベルツスとは異なり、労働に作用しそれを方向付け指導する指揮官のような精神又は理知（Geist）、意思（Wille）、換言すれば言語と科学、倫理（道徳や法）と労働との三位一体的な *dreieinig* な結合と共働作用を除外している。それは何を意味するかと云えば、マルクスは労働オンリーの孤立經濟觀に陥り、社会、經濟、國家、經濟が全く欠缺しているという重大な思想的欠陥、ユダヤ特有の精神病に陥っているということを意味する。モーセのトーラの律法（ハラコート）に表明されている秩序付けと組織化の欠如、コスモスではなくて反対にカオス（渾沌）に陥り、種々の不合理・背理・矛盾を把している極性志向の反社会主義、反國家主義を意味しているから、社会主義 *Sozialismus* ではなくて反社会主義（*Anti-Sozialismus*）を意味している。マルクスには歴史的な社会形成に就ての學術的論文は一

つも無い。社会の概念、本質に関する社会哲学的、社会学的研究文献は無い。マルクス主義を科学的社会主義に祭り上げたエンゲルスは無知なライアー（嘘付き）であり、その嘘を盲信したマルクスかぶれは、ヘブルのダイアスポラ（Diaspora）又は捕囚のユダヤ人（Jew in Exil）に相當する。

血は争えないもので、マルクスも亦、伝統的なヘブル的特殊の普遍化、パティキュラリズムとユニヴァーサルリズムとの結合、ユダヤ的思考方法に陥っていたわけである。マルクス自身もマルキストも此の思想史的事実を知らない。

(二) ゲオルグ・イエリネック及びハンス・ケルゼンの「一般國家学」におけるユダヤ的特殊の普遍化

ヘブル的特殊の普遍化と云うことは、我々の國家学、憲法学においても見受けられる。何れ詳細に考察して見たいと思つてゐるが、こゝでは私の氣付いた限りに於いて若干の事例を紹介する。

従來我が國において、ゲオルグ・イエリネック著の『一般國家学』（Georg Jellinek, Allgemeine Staatslehre 1900）に就て、それが特殊國家学であることを指摘しエリネックの國家法人説の崩壊という見解を表明した学者としては、私が知り得た限りにおいては佐治謙讓教授（元九大、後陸大、国法学）あるのみである。（日本学としての日本國家学、國家法人説の崩壊という著書あり）

それにヒントを得てヘブル思想の立場から照射すると、確かに『ヘブル的特殊の普遍化』と云うことが看取され得る。G・イエリネック（Georg Jellinek 1851～1911）は、ライプツヒヒの人で後にウイーンのユダヤ僧になったアドルフ・イエリネックの子であり、ウイーンにおいてはユダヤ人の出自の故に客員教授にとどまつたが、後にバーゼルで正教授になった。主著に、主観的公法体系（一八九二年）と、一般國家学（一九〇〇年）とがある。彼の一般國家学は、我が

国に於ては、國法学・憲法学の領域ではバイブル的存在であつて、彼の『国家法人説』が帝国憲法の解釈に就ての基礎理論として通用していたことは、美濃部達吉（東大）、佐々木惣一（京大）、河村又介（九大）等の著名な諸教授の学説に就て見ても分る。

扨て、この普遍妥當性の要求をしているG・イエリネックの『一般的Allgemeine』ということにヘブル的特殊の普遍化が無かつたかと云えば、無かつたとは云えない。私の氣附いた点を若干摘記すれば次の通りである。

a) 神主制 (Theokratie)

G・イエリネックは、一般國家学において、神主制を次の二つの形態に區別している。

その一は、神が人を支配するという形態であり、その二は人が神として支配すると云う形態である。然し、神主制という用語は、其の一の神主制に就てのことであり、フラヴィウス・ヨセフス（古代ユダヤ人の歴史家）かモーセの支配形態に就て初めて使つた言葉であること、又、それがイデオロギーにとどまるということは周知の通りである。その意味内容に就て見れば、一神教・單神主義、そして神人分離が鉄則となつてゐる。然るに神が人を支配する、ヘブル人を支配するのみならず全人類を支配する、と云うのである。それがヘブル的特殊の普遍化、パティキュリズムとユニヴァーサルイズムとの結合と云うユダヤ的思考方法であることは云う迄もない。

其の二は、右のヘブル思想に特有な神主制とは全くその意味内容を異にし、多神教・汎神主義―自然であれ人であれすべて超人間的なものに神技を見、神霊を見る神人融合の思想に基づいてゐるのであつて、君主に限らず太陽であれ大風であれ聖人君子であれ、すべて偉大なものを『上』↓神として尊崇する思想に基づいてゐる。

従つて其の一と其の二とは全く意味内容が異なるから、其の一の神主制のイデオロギーを、其の二に適用して神主制と称すること。そして前者を範型として後者をその型に嵌め込むことは明らかに不合理である。未だ國家を有せず前國家時代のモーセの祭司制に就て用いられたイデオロギーを、後國家時代の現神王（バビロニアのハムラビ王の如し）、又は現人神（日本の君主制の如し）に適用すること自体が不合理である。G・イエリネックは、ヘブル的特殊を一般化して、そのイデオロギーを多神教、汎神主義の君主制に適用している。そういう考え方それ自体が、ユダヤ的思考方法だということである。

b) 国家法人説

G・イエリネックは、國家学を國家社会学と國法学に分け、前者の立場からすれば國家は団体的統一体であり、後者の立場からすれば國家は公法人である、という見解を表明している。そこにもヘブル的特殊の普遍化現象が看取される。何故か？

國家が法人であるということは、社会団体としての國家は自然人と同じく法的人格者 *Rechtsperson* と云う意味であり、権利能力を有するものと云う意味である。団体が自然人に劣らず、或はそれ以上に法主体として社会的活動を営み得るが故に、自然人に就ての法的人格者の概念を社会団体に適用したものである。従つて法人概念は、自然人に就ての法的人格者→権利能力者→權利義務の主体となり得る能力を有するものという考え方を、人の組織体である社会団体に適用したものであるから、法人撰制説は首肯され得る。

然し法人概念が歴史的特殊であつて、時間的・空間的に限定されていることは云う迄もないから、普遍妥當性を要求

し得る概念ではない。例えば古代國家から中世の國家、産業革命が始まり団体の社会經濟的活動が顯著になる迄は、法人概念は無かつただろうし、又客觀的・命令的・公法優位の思想が強いローマ法の下では個人は國家に対しては權利なしということであつたろう。それ故、法人概念は土地所有に代つて資本所有が重要な意味を持ち、商工業、交換經濟、貨幣經濟が発展し、貨幣の資本化が進展した社会經濟の時代に這入つてからの法的技術であつて、ヘブル法及びゲルマン法のような主觀的・要求的・個人主義的、私法優位の法思想の下で形成された法概念と見てよいだろう。銀行のような株式会社はもとくユダヤ人のアイディアに基づくという説も見受けられる。

然し、そのような歴史的に條件付けられた法人概念を國家に適用して、普遍妥當的に國家は法人であると断定するのは行き過ぎであつて、國家を個々の株主から成る統治株式会社と見るが如き考え方を一般化したものと云えるだろう。然し國家といわれる歴史的社會形成は、武力的征服という外的要因と血族婚姻のタブー(禁忌)という内的要因とに依つて、主として血縁的軀帶によつて結合した部族トライブの段階から血縁的・地縁的・文化的運命共同性の軀帶じんたいによつて形成された民族の段階へ移行するにつれて形成された社会的生命共同体であつて、その生命を脅かす内的・外的攻撃の危険に堪えて全一体を形成しているのであり、従つて社会学の高田保馬博士(京大教授)が云つた通り、究極的には『防衛の組織』と云えよう。従つて私法上の權利能力とか契約思想、そして法人概念を適用するのには自から限界と云うものが在る。所謂財産權の主体としての國家、國庫としての國家には準用することができても、公權力の主体としての國家に適用するには、おのずから限界がある。國家はフォルシュトフ教授が云つた通り、支配の組織(Herrschaft organisation)であり、その支配關係には、一般權力關係と特別權力關係がある。その公法に固有な領域に迄、私法上の權利義務の關係や私法上の契約關係を適用するのは明らかに合理的ではない。法律上の人、權利能力者としての法人概念を權利、義

務の関係ではない公法上の一般的及び特別的權力関係に適用して、國家は一般的に公法人であると断定するのは、合理的ではない。帝國憲法においてはその規範内容においてこのようなヘブル・ゲルマン法的特殊は存在せず日本固有法が支配していたが、憲法の注釋や解釋においては、G・イエリネック流の國家法人說、天皇機關說が見受けられた。然しそういう解釋法学は、法思想の立場から見れば誤りを犯していたように、私には思われる。

次に、ハンス・ケルゼンの一般國家学に就て見よう。彼もユダヤ人と云われているが、周知の通り彼は方法の純粹を主張し、G・イエリネックの國家学を批判して方法的混同主義と批判した。そして法から見た國家は、根本規範(Grundnorm)、即ち法論理的意味の憲法を最高規範とし、実定的意味における憲法、法律、命令、司法判決と行政處分へ降下する統一的な法規範体系であるという見解を表明した。そこで根本規範と云うのは法学上の假設と見られていた。然しこのような一元論的國家觀は、G・イエリネックの法と社会との二元論的國家觀より以上に、ヘブル思想に特有な思考方法を表明しており、カール・マルクスの唯物論的一神教、一元論的階級國家觀と同様に、モーセ以来の思惟の絶對主義を表明しているように思われる。云わば法学的、^一神教のようなものではなからうか？ 又そこで「一般的」(allgemeine)と云うことは、G・イエリネックの「一般的」より以上に、ヘブル思想に特有な片面的・独断的な一元論的「特殊の普遍化」を表明しているように思われる。

思うに、民族—血縁的、地縁的、文化的、運命的共同性によつて結合された社会集團—を根基とする歴史的な社会形成—社会的生命共同体 (Lebensgemeinschaft) を考察する場合は、カール・ロートヘルツスが、精神又は理知 Geist、倫理的意思 (Wille)、物質的な力 (materielle Kraft)、換言すれば認識能力 (Begriffsvermögen)、決断能力 (Bestimmungsvermögen) 及び運動能力 (Bewegungsvermögen) の三位一体的 (dreieinige) な生命共同体 (Lebensgemein-

schaft)と見たように、寧ろ多元的な統一的方法論で全面的綜合的に把握すべきではないかと考えられる。『神』『自然』『理性』『法』或は『経済』と云うような方法一元論的立場からでは、ヘブル的一様性の統一にとどまり、國家はその限られた一面が照射されるのみであるからである。勿論、一元的な方法論で認識対象に鋭く斬り込むことも必要であろうが、そういうヘブル的一様性の統一ではなくて、ギリシア的な多様の統一が必要であろうと思う。

(二) 個人主義と世界主義

— Partikularismus und Universalismus (その二)

パティキュリズムの原意からすれば、それは部分主義、個別主義と云う意味であり、それに対する概念としてのユニヴァーサルイズムは全部主義、全一主義を意味する。然し社会思想として見れば、事物の部分、細片に就ての強い関心を有すると云う意味のパティキュリズムと云うことは、社会の全体、整序され法組織化された公けの共同体の構成分子である個々の人に就ての強い関心を意味しているから、個人主義 (Individualismus) を意味することになる。そしてこれに対する概念としてのユニヴァーサルイズムは、公けの共同体、有機的全体に就ての強い関心を意味するから、全一主義、従って全体主義 (Totalitarismus) を意味することになり、ナシヨナリズム (民族主義、国家主義)、進んでは愛国主義 (Patriotismus) という意味につながる。然しヘブル思想、ユダヤ的思考方法においては、そのような通常の意味とは全く異なり、個人主義と云う意味でのパティキュリズムに対する概念としてのユニヴァーサルイズムは、有機的全体、すべて社会的なるもの (das Soziale) ↓結合と共同作用を缺いだ全一主義、全体主義であり、反社会、反國家主義を意味している。尾高朝雄教授 (東大、法哲学) の言葉を借りれば、そのユニヴァーサルイズムには、全体全

としての國家もそれを脊負う「部分前」としての國家（『統治府』もそこには無い。（尾高、國家構造論、参照）

それ故その全一主義、全体主義は、個人から社会を抜きにして人類とか世界に飛躍したユニヴァーサルイズムと云うことになる。従つてそれは普遍人類主義、或は世界主義、世界市民主義（コスモポリタニズム）或は又主体性なき国際主義と系列を同じくする觀念論的そして主觀的イデオロギーと云うことになる。

扱て個人主義と云う意味でのパティキュラリズムに就ては、それが重商主義、拜金主義と結合していること、そしてそこにベブル思想に特有な自然主義やヒューマニズムが在り、それが市民的自由主義と結合し之をプッシュしていた法思想史的事実に就ては、既に説明しておいたから繰り返さない。（ユダヤ人嫌忌・迫害とユーデンツーム Judenthum の反社会的性向、ユダヤ思想の研究、No.10、福岡大学法学論叢、第四十七卷、第二号、平成十四年九月、三四〇（三八）頁—三四五（四三）頁）こゝではその後氣付いたことを附加し補完するにとどめる。

國家を持たない奴隷出自の遊牧の幕舎の民↓ベブル人が岩山の砂漠の散砂のように結合意欲が乏しく地縁的共同性を缺いた反社会的思想的性向の人民であつたということ、そして亡国のユダヤ人が益々個人主義的思想傾向を強めたということは云う迄もないが、その個人主義が主觀主義 Subjektivismus と結び付いていたということを更に附加して置かう。この個人主義と主觀主義との關聯に就ては、R・シュタムラーが鋭い分析をしている。彼は主觀主義を次の二つに區別している。

其の一は、客觀的に正しい認識と努力の可能性を見抜いていながらそれに従わないで主觀的にのみ通用する目標と努力を究極的な法則として採用するということ。

其の二は、客觀的に正しい成果を有し得たにも拘らずその可能性を見抜かないで單に主觀的にのみ通用する判断にと

どまつているということ。

シュタムラーは前者に就てこれを「客観的正當性への努力の意識的放棄」と称し、後者に就てはこれを「客観的正當性の可能性への疑い」と称してゐる(Rudolf Stamme, Lehr-buch der rechtsphilosophie, Berlin und Leipzig, 1923, Walter de Gruyter & Co. S. 312~313)

ヘブル人、(ユダヤ人)の場合は、右の主観主義の其の一、其の二の何れに該當するであろうか？私の見るところでは、其の一には該當しない。何とならばユダヤ的思考方法に於ては主観的意欲(Wollen)が客観的認識(Wissen)を圧倒してゐたからである。客観的に正しい認識を得ようという努力すら怠つてゐたように思われる。それではその二に該當するか？然り。客観的に正しい認識を得ようと云う努力をすれば、この主観的人民又は民族は正しい認識を獲得し得たにも拘らず、單に主観的にのみ通用する判断をしてゐたからである。

そこで想起されるのは、ハンス・コーン(Hans Kohn)の次の言葉である。「猶太人は見るよりも聞く。」猶太人は時間(Zeit)の中で生活している。猶太人の感覺は輪廓を描かないで内面的潮流に耳を傾ける。其の機関は「耳」(Ohr)であり其の形式は「叫び」(Ruf)である。神の声が何時でも彼のみに聞えて来る。(Hans Kohn, Die Politische Idee des Judenthums. München 1924. s. s. 10~15. 拙著、猶太思想の研究、日本文化連合会発行、昭和四四、三十六頁)すべてが一つのものに向つて走るシナイの曠野、変化に乏しく眼を樂しませる何物も無いような荒涼たる自然、そして艱難と痛苦に満ちた生活環境を想えば、ヘブル人の感覺が空間的感覚よりは時間的感覚、彼らの機関は耳(ohr)であつて「眼」ではないと云うコーンの言葉は肯綮に當つてゐるように思われる。

このような個人主義的、主観主義的なヘブル思想は、モーセの律法(トーラ中の法規的部分)及びタルムードの律法

に現われているのであつて、ローマ法と異なりゲルマン法に近く、法の性格が主観的、要求的、個人主義であつて、私法優位の法思想となつて現われている、ということのを附記して置こう。

(イ) モーセの一神教とヘブル人

モーセは個人主義者であつたかと云えば「No」と云わざるを得ない。何とならば、彼はパブリック、マインドが旺盛な人物であり、出埃及は勿論のこと、未だ國家（公けの共同体）を持たないヘブルの部族聯合を強化して外敵との戦闘に対処し、カナアンの地（パレスチナ地方）に、彼の言葉を使えば「聖き祭司の國」↓現實には僧政國家、部族聯合國家を建設しようという志業、目的を抱いていたから、個人主義者どころかその反対の共同主義者であり、ナシヨナリストでもあれば進んでメシア的大望に燃えたパトリオットであつたからである。彼の一神教には後世のユダヤ宗教的民族主義の源泉が見受けられる。

それでは彼の一神教、宗教的理想主義、宗教的絶対主義には、主観主義 Subjektivismus はなかつたか？無かつたとは言えない。宗教と云うものを客観的に見る眼が缺けていたからである。彼の一神教、宗教的思惟の絶対主義は、もとより宗教、神に就ての客観的・科学的考察の結果ではなくて、政治的、実践的意欲の結果であるからである。其の主観主義に個人主義が結合しているかと云えば、答えは否！である。モーセの主観主義は個人主義とは結び付いておらず、その反対の共同主義 (Communitarianism, Kommunismus) と結び付いており、公けの共同体の建設を志向する固有の意味での社会主義、そしてナシヨナリズムと結び付いている。従つて我々は個人主義と客観主義とは必ずしも論理必然的に結び付くとは限らないと云うことが分る。

それでは個人主義と云う意味のパティキュラリズムではなくて、個別主義・孤立主義と云う意味でのそれと解すれば、モーセの一神教の場合、この意味でのパティキュラリズムに該当することは明らかである。モーセの神は孤独の神であり誰とも結合しない「妬む神」でありロビンソン・クルーソー的存在であることは、すでに指摘して置いた。そこでは個別主義又は孤立主義が主観主義 Subjektivismus と結び付いている。要するに思考の仕方、方法 (Denkweise) と云う意味では、そういうことになる。そういう思考の仕方がヘブル思想又はユードンツームに特有な極性 (Polarität) 志向の思惟の絶対主義、中庸を缺いだ一元論的、観念論的世界観であつたことは云う迄もない。

それではこのような世界観の対極を成していたものは何か？それは、未だ国家を持つに至らない奴隷出自のヘブルの十二部族、アリストテレスの言葉を藉りれば、劣等人か超人かその何れかに該当するヘブル人、超人ではなく凡人であるから劣等人に該当しよう「うなじの強い人民」(強情で頑固な従属性、共同性に著るしく缺ける人民)の個人主義、主観主義、現実主義である。

モーセが山に行つてなか／＼帰らないと、もうモーセを裏切つて新たな導きの「神々, Götter」を与えよとアロンに迫つた心変わりの早い荒れ騒ぐ愁訴の民が居たのであり、それを看取していたモーセが尋常一様的手段では統一統合はできないと考えての方策、建国の手段が宗教的絶対主義→一神教であつたわけである。ヘブルの妬む民の心がモーセの一なる妬む神を産んだと言えよう。

(ロ) イエスのメシア教的世界主義

次にイエスのメシア教に就てモーセの宗教と比較しながら考察して見よう。

イエス (Jesus) の身元は、モーセのようにはっきりしていない。ナザレ (Nazareth) のヨセフとマリアの子と伝えられているが、ナザレはガリレー (Galilee) (パレスチナの北部地方) を意味するから、往昔の北イスラエル王国の支配地域であったところである。父のヨセフは、イエス自身が農民であったことを示唆しているように思われる。(新約聖書、ヨハネ伝、第十五章一、Martin Luther, Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments, Berlin 1931 4. Das Evangelium des Johannes. Das 15. Kapitel-1, "Ich bin den rechte Weinstock, und mein Vater der Weingartner." 私はまぎしく葡萄の幹にして私の父は葡萄栽培者なり。和訳聖書では、農夫と訳されている。)

イエスが民租アブラハムやダヴィデ王の子孫であるとする新約聖書マタイ伝福音書第一章冒頭の記事は、すでに指摘して置いた通り、ユダヤ教の大祭司ヒルレルの場合と同様であって、系図の假託であり、イエスを聖化し權威付けんが為の作りごとと見てよい。それを書いたとされているマタイ (Mathaios) はイエスの十二使徒の一人で、ヘロデ大王の息子 (ガリレーの太守) ヘロデ・アンティパス (Herod Antipas, B. C. 4~A. D. 39) の税吏をしていたと云う。當時のユダヤ王はヘロデ・アグリッパ (Herod Agrippa) I (B. C. 4~A. D. 44) であって、彼はハスモンア王朝の下で宰相をしていたアンティパトロの子であったから、ヘロデ大王と同様に王家の出自ではなくむしろ臣下の出自である。それ故にイエスが活動した時期はローマ支配下の逆臣相次ぐ不安定な時代であり、ローマ初代の皇帝アウグスツス (本名オクタビアヌス) に取り入りヘレニストのヘロデ大王の死後の不安と動揺の時代であったことが分る。當代には約十三の新興宗教があったと伝えられているが、イエスのメシア教もその一つであって、彼の救済、授福のメシア教はユダヤ教の存立を脅かすほど強勢であったようである。北ガリレーから南の首都エルサレムに乗り込んでパリサイ人と衝突しサドカ

イ人の祭司たちに脅威を与えたほど、強勢であつたことが窺い知られ得る。

イエスの宗教は、モーセの一神教を継承し、ヘブルの宗教文化史を貫くメシア思想を継承し、ヘブルの予言者の血をひいていたことは疑いないが、モーセの一神教における政治的・酵素は消滅しており、ユダヤ教—とりわけその保守派（パリサイ派の如し）の宗教的民族主義とは異なり、純粹な普遍的愛の宗教へ革命的变化を遂げていた。神名はヤハウェ Jahwe からエホバ Jehova に改称され、重牧輕農の神は重農輕牧の神へ変化していた。又「神のものは神へ王のものは王へ」というスローガンが示しているように、國家と教会、政治と宗教とが分離されていた（政教分離）。イエスは、メシア王（Messia Mälek）を以て任じていたが、後世の星の子バアル・コクバが高僧のアキバから「メシア王」と云われたのとは異なり、彼岸の世界のメシア王を以て自任していたことは、イエスが捕えられピラツス総督の訊問に対して、「私はこの世のものではない」と云っているところからしても疑問の余地はない。イエスのメシア教（基督教）は、モーセの一神教から政治的民族主義、ユダヤ教から宗教的民族主義を取り除いた純粹な普遍人類教に革命的变化を遂げていたのである。それがヘブル的特殊の普遍化であることは、すでに指摘して置いた。

然し、イエスもモーセと同じく個人主義と云う意味でのパティキュラリストではなかつた。身命を賭して民衆の救済、授福、佛教で云えば衆生済度の為に戦わんとした純粹な宗教家であつたから、パブリック・マインドの旺盛な人物であつたことは云う迄もない。従つて個人主義と云う意味でのパティキュラリズムと云うことは、彼の場合にも通用しない。

それでは個別主義・孤立主義そしてそれと結合した主觀主義と云う意味でのパティキュラリズムは通用するか？モーセの一神教の場合と同じく、その意味での思考方法はイエスにも通用する。そしてそれが普遍人類主義、世界主義と云う意味でのユニヴァーサルリズムと結合していたことは云う迄もない。そこにはモーセ又はユダヤ教のような政治的又は

宗教的ナショナリズムの要素はないから、宗教、それ自体の性格においては、民族的公教、或は國教 (National Religion) ではない。そこに國民 (Nation) としての共通の宗教的広場は存在しない。云わば國家成佛の宗教ではなくて個人成佛の宗教である。たといそれが國家に公認され (公認教となり)、進んで國教とされても、宗教それ自体の性格においては私教であり個々の人民の信仰に就てのことである。

(ハ) マルクスの唯物論的一神教

マルクス主義はマルクス自身が思いも及ばなかったほどユダヤ的思考方法を示しており、従つて前述の通り唯物論的一神教であると特徴付けた。マルクスの場合には、モーセやイエスの場合のようなパブリックマインドは見受けられない。彼には個人主義と云う意味でのパティキュラリズムが當嵌るし階級國家、階級法、階級闘争の歴史觀等階級至上主義ではあるけれども、本質的には、又究極的には、個人主義が當嵌るし、シラーの群盜 (J. Ch. F. Schiller 1759-1805. ドイツの詩人、劇作家。Die Räuber 1781) を想起させる集群的個人主義に陥っている。プロレタリア革命、私有財産の公用徴収は、叛乱を意味するし集団強盜を意味するからである。プロレタリアの無政社共產社会などは、モーセの神の國、イエスの天国と同様なユダヤ特有のメシア的願望の表明であり未来天国のユートピアに外ならない。個人主義と云う意味でのパティキュラリズムが彼の場合には通用するし、それと主觀主義が結合している点において、モーセ並びイエスの場合とは異なる。そしてその主觀的個人主義が世界市民主義と結合していたわけであつて、そこに一種の空想的、世界主義が見受けられる。彼のコスモポリタニズム (世界市民主義) に就てはすでに述べて置いたから繰り返さない。

(ヘブル思想とコスモポリタニズム・福大法学論叢所載)

(二) ツイオンの賢者たちの議定書の世界主義

最後に有名な怪文書、ツイオンの賢者たちの議定書、(プロトコール)の世界主義を採り上げて考察しよう。そこに表明されている思想は、明らかにヘブル思想、ユーデンツームに特有なユニヴァーサルイズムである。それはモーセの神の国やイエスの天国と同様に一つの国家と云う思想であり、世界國家の思想である。従つて國家を否定するマルクスの世界市民主義と云う意味でのユニヴァーサルイズムやインターナショナルイズムとは異なる。

一つの世界國家と云う思想は、何もヘブル思想に限らず、ダーヴィンの進化論やヘーゲル及びロートベルツスの歴史は進歩發展すると云う歴史哲学、又は社会哲学などは、究極的に一つの世界國家と云う思想に到達せざる得ない。然しその世界國家は、科学的、哲学的根拠のある思想であつたが、何時到來するやもしれぬ遠い未來の暗闇に包まれていた。

然し、ツイオンの議定書に表明されている世界國家は、別に科学的、哲学的根拠は無いヘブル特有の主觀的・メシア思想的イデオロギー以外の何ものでもなかつた。それは現実性 *Realität* に乏しい空想的世界主義思想であつた。従つて後述する通り、それをリアルなものと考えて、やれユダヤ人の世界征服の陰謀であるとか、その反対にゴイム(異邦人・外人)たちの反猶主義の捏造、偽造文書であるとか云うのは、何れもこのプロトコールのそれ自体の思想内容に就てのことではないのであつて、ゴイムの政治的利用、ユダヤ人嫌惡、迫害の弁明か或はそれに対するユダヤ人の反撃を意味する。その点に就ては後述することにして、このプロトコールそれ自体の内容に就て考察すると、それが明らかにヘブル思想に特有なユニヴァーサルイズムを表明していることは疑いない。ユダヤ人の作であろうとなかろうと思想的にヘブル的特殊を表明していることに就ては争ひの余地はない。その作者が誰か、一人で書いたかどうかユダヤ人が書いた

たかゴイが書いたか、何時どこで書かれ発表されたか？に就ては争いがあるが、作者は一人であつたことは疑いない。何とならば若し複数のツイオンの賢者たちの会議の議定書であつたとすれば、昔ユダヤ人仲間においてチャカミム（賢者）と云われたツイオンの長老たちのように理路整然とした文章であらねばならないし、議定書の性質上もつと簡潔明快な議決事項が書かれていなければならない筈である。それはツイオニストのバーゼル会議の綱領を見ても分るだろう。然しこのプロトコール（議定書）は、くどく／＼ながながとモーセのトーラやマルクスの資本論に見受けられるような秩序付けや組織化が拙劣な文章、文体になつてゐるし、凡そプロトコール（議定書）の体を成してゐない。それ故この作者不明のプロトコールは、誰かが独りで書いた作品であり、それをプロトコールと偽つてゐる。従つて独りで書いた作品をツイオンの賢者たちの議定書と虚偽の作品名で発表してゐる。

このツイオンの議定書に就て、それが(a)一九〇二年に帝政ロシアにおいて、セルゲイ・ニルス (Sergei Nils) によつて初めて発表されたこと、それから(b)一九一九年にロシア移民によつて西欧にもたらされ、各国語に翻訳されて広く世界に普及するに至つたこと。(c)その内容が権謀術数のマキアヴェリ的手法で書かれてゐること。フィリップ・グレーブス (Philip Graves) と云うロンドン・タイムスのコンスタンチノール特派員が、このプロトコールはM・ジョリ著、マキアヴェリとモンテスキュー対話篇 (M. Joly, Dialogue aux enfers entre Machiavelli et Montesquie, Brussels, 1865) からの借り物、其の模倣であることを証明したと云うことに就ては争いがない。然しそれ以外のこと、即ち作者の氏名、作成年月日、発行者、並びに発行した場所、等に就ては、はつきりしたことは何も分らない。そして作者がユダヤ人であるかユダヤ人ではないゴイム（外人）であるかに就ては、最も争いがあり、ユダヤ人が書いた世界征服の陰謀の文書であるとか、ゴイムの反猶宣伝の造り事 (Anti-semitic fabrication) とか、見解が真向から対立してゐる。私

の所見は次の通りである。

何は兎もあれこのプロトコールの内容に就て見るに、そこにはユダヤ人の世界支配計画、陰謀、方策が第一議定から第二十四議定に亘つて雑然と書かれており、よほど奸知にたけた政治戦畧家でなければ思いもよらないような権謀術数が見受けられる。力の哲学と金の哲学、一神教による世界支配、専制、独裁、そして一人のダヴィデ王の支配等々、枚舉に暇がない。(四王天延孝著、猶太思想及運動、昭和十六年)

ヘブル思想又はユーデンツームの立場からこのプロトコールの内容を照射すれば、ユダヤ教徒の伝統的な宗教的民族主義ではなくて、明らかに政治的、民族的立場で書かれている。このプロトコールの匿名の作者自身が、ツィオニズムの血を受けた我々の独裁者(第五議定書)と書いている。ツィオニズムはすでに詳しく説明した通り、(拙著、猶太思想の研究、日本文化連合会、東京、改訂ツィオニズムに就て)十九世紀中葉以降の帝制ロシアやポーランド(ユダヤ人が最も多く居住していた地域)における度重なるポグロム Pogrom (破壊) ↓掠奪・強姦・殺傷・放火等の反猶暴動が結果したユダヤの政治的民族主義の一派であつて、(特にヒバト・ツィオン⇨ツィオンの愛の運動及びビルと称する青年組織等)、パレスチナのツィオン Zion の故地に猶太國家を再建しようという思想及び運動である。このツィオニスト達が帝制ロシアに怨根を抱き敵意を抱いていたことも、プロトコールの第四議定書に、「帝制ロシアとローマ法王」を以て「我々の最大の敵」と書いてあるところから見ても分る。従つてプロトコールの作者は「ツィオニストのユダヤ人だ」ということになる。又それを裏付ける証拠もプロトコール中の文書に数多く見受けられる。例えばゴイ goi、ゴイム goim (外人) という言葉をよく使っているが、昔のタルムードにおいては「タルムードを研究するゴイは殺さるべし」と書かれていただろう。外国人に対する敵意怨恨が燃えており蛇のように奸知にたけた執念深さが出ている。蛇がユダヤ

人の象徴であることは知っていたが、その蛇が『両頭の蛇』(第三議定書)と云うことなどは、ユダヤ人以外には知らないだろう。フリーメイソン(自由石屋、中世のギルドに由来する)を情報収集所(第五議定書)と云ったり、ユダヤの一神教以外の宗教の破壊、(第十四議定書)その他、力と金による専制主義、ユダヤ王、その選定君主制など、ユダヤ的色彩が極めて濃厚であって、誰しもゴイムが書いたと思う者はないだろう。然しこのプロトコルはユダヤ人が書いたものではないと主張する者がある。

例えばセシル・ロス(Cecil Roth)は反ヤムの作り手とAnti-semitic fabrication)と主張し、ユリウスH・シヨエプス発行の新ユダヤ辞典では反ヤムの扇動文書である、と主張している。参考迄に後者を和訳して紹介して置こう。

『ツィオンの賢者たちの議定書。いわゆるユダヤの世界支配を達成せんが為の計画に関する偽造された反ヤムの扇動文書(gefälschte antisemitische Hetzschrift)、幾多の言語に翻訳されて百万倍流布された。恐らく一八九七年と一八九九年の間にパリで書かれたものであろう。委託者はロシア皇帝の高級警察官、ピョートル・イワノウィッチ、ラトシュコウクシー(Piotr Iwanowitsch Ratschkowskij)であったが、原作者は分らない。一九〇二年―〇七年に、P・A・クルシェワン(P. A. Krschewan)とG・W・ブートミー(G. W. Butny)により、ロシアにおいて発行され版を重ねた。ツィオンの賢者達の議定書は、世間の周知となつた表現法で、神秘的な作家のセルゲイ・ニルス(Sergei Nils)著、『小の中の大と近い政治的可能性としての反クリスト』(Der Anti-Christ als nahe politische Möglichkeiten 1901)の第三版の附録として印刷された。その拙劣な偽造文書は、架空なユダヤの秘密政社、ツィオンの賢者たちの會議を描寫し、友ユダヤの世界的潰瘍のキリスト教的傳統に立ち歸つて把握し、それを恣意的にパーゼルにおける第一回ツィオニスト會議(一八九七年)の秘密の附帶的議定書と一緒にし、そしてユダヤ人とフリーメイソンの共謀を示唆し

ている。実際、ツイオンの賢者たちの議定書は、その大部分がナポレオン三世に対するあるフランスのパンフレット、一八六八年のモリス・ジョーリ (Maurice July) の、マキアヴェリとモンテスキューとの対話篇 (ドイツの「力対理性、マキアヴェリとモンテスキューとの冥府の陰謀 (一九六八年) の剽窃に基づいている。もとくロシア皇帝の秘密警察がツイオンの賢者たちの議定書を引用したのであつて、それは血腥い幾多のボグロム (Pogrom ↓ 反猶暴動) に終つた。たといツイオンの賢者たちの議定書がドイツにおいてはO・フリードリッヒ (一九二〇年) アメリカ合衆国においてはベルンシュタイン (一九二一年)、そしてロンドン・タイムスにおいてはP・グレイヴス (一九二一年) その他これらに類する者により偽造であるとして暴露されたにも拘らず、再三再四不合理にも架空なユダヤの世界支配による不安と無力感を惹起したのである。かくてフランス、ポーランド、アメリカにおいては、ヘンリー・フォードが一九二〇年―二七年にかけて、拡散させたし、ドイツにおいては、ツイオンの賢者たちの議定書は、ナチスの支配下において、反ユダヤ・テロの弁護の為の特別な癒し難い役割を演じたのである。一九四五年以後、ツイオンの賢者達の議定書は、反ユダヤ、反イスラエルのプロパガンダとして採用された。エジプトではナセルの下で、ヴァチカン會議中にスペイン版としてあらわれた。(B. M) (Neues Lexikon des Judentums, herausgegeben von Prof. Dr. Julius H. Schoeps Gütersloher Verlagshaus, p. 678~699)

扱て右の新ユーデンツーム辞典所載の匿名の執筆者 B. M. の記事に依れば、ツイオンの賢者達の議定書は、恐らく一八九七年―至一八九九年頃、フランスのパリーにおいて、帝政ロシアの高級警察官僚ラトシニコフスキーの委託により、匿名の某氏 (X氏と云つて置こう) が、一八六八年のモリス・ジョーリ作「マキアヴェリとモンテスキューの対話篇」の剽窃に基づいて書いたもので、それが一九〇三年乃至一九〇七年頃ロシアで出版され、版を重ね、それがセルゲイ・

ニルスの一九〇一年の著書の第三版の附録として發表されたということ、そしてそのツイオンの賢者たち議定書を、ロシアの秘密警察が利用したので、度重なる流血のポグロムを結果したということになる。

然しポーランド及び帝政ロシアにおける度重なるポグロム（反猶暴動）が発生したのは、一九世紀中葉以降であつて、一八八一年のポグロムが、ロシアユダヤ人の青年組織ビル（Bir）とかヒバト・ツイオン、Hibbat Zion（ツイオンの愛）の運動↓ツイオニズム（ユダヤ政治的民族主義の思想運動を結果したのである。これは歴史的事実であつて、一八九〇年には、オデッサ會議が行われ、アハド・ハアムはそれに参加している。そして一八九七年七月には、スイスにおいて有名なバーゼル綱領（Basel Programm）が採擇され、世界ツイオニスト會議（W.Z.O.）が結成されている。

そうすると、一八九七年〜九九年頃、フランスの巴里で帝政ロシアの高級警察官僚の委託によりプロトコールが書かれ、一九〇三年乃至一九〇七年頃、ロシアで版を重ね、それを帝政ロシアの秘密警察が利用した結果、度重なる流血のポグロム（反猶暴動）が発生したという、新ユーデンツーム辞典所載のB・M氏の記事は、一八八一年に度重なるポグロムが発生し、ツイオニズムの思想及び運動が発生したと云う歴史的事実と矛盾する。一八九七―九九のプロトコールの作成、或は一九〇三―〇七年のロシアでの発行年よりも遙か以前の一八八一年にポグロムは発生しているのであるから、ツイオンの賢者達の議定書の作成を帝政ロシアの高級警察官が作者に委託したということ、並びにロシアの秘密警察が利用した結果ポグロム（反猶暴動）が発生したと云うことはあり得ない。そうすると、プロトコールは、帝政ロシアの警察官憲の委託によつて書かれ、秘密警察によつて刊行され撒布された反セム扇動文書だとか、拙劣な偽造文書だということ、要するにユダヤ人が書いたものではないというショエプスの新ユーデンツーム辞典B・M氏の弁明はすべて、科学的根拠が無いと云うことにならざるを得ない。

私はこのプロトコールは帝政ロシアのボグロムに憤慨し怨恨を抱いたツィオニストのユダヤ人の作者以外にはなからうと思う。そこでクロース・アップして来るのがすでに指摘して置いた通りアハト・ハアーアム Achad Ha-am (本名アッシャーギンスベルグ Ascher Ginsberg 1856—1927) であり、彼を描いて外には見當らない。彼はツィオニストのオデッサ会議にも出席しているし、スイスの第一回ツィオニストの会議にも、恐らく出席しているだろうから、その頃にアハド・ハアーアムが書いたものではなからうか？要するにプロトコールはユダヤ人のツィオニストの誰かが書いたものであるうし、それもユダヤの世界支配の計画、陰謀と云ったものではなく、帝政ロシアに反感を持つツィオニストの夢物語りであり、ユダヤ思想に特有な一種のメシア的ホープ (Messianic Hope) がマキアヴェリの権護術数のユダヤ的表現として現われたものと、推定される。それをゴイムたちが利用し反猶宣伝の手段として使った事実は私も認める。ゴイム (Goyim) がツィオニストの空想を反猶宣伝の道具として悪用した事実は、否定できない。

三. 分立主義と統一主義

— Partikularismus und Universalismus (その三)

更にパティキュラリズムと云う言葉には、分立主義又は分立割拠主義、宗派主義、派閥主義、セクショナリズム (sectionalism) と云う意味を有することがある。(醫學でセクショナリズムと云えば解剖主義を意味する。) この意味でのパティキュラリズムに対するユニヴァーサルリズムと云えば、統一主義、統合主義を意味しよう。(醫學では縫合主義とでも云うべきものだろう) 但し、統一と云つてもヘレニズム (希臘思想) とヘブライズム (猶太思想) とではその意味内

容を異にするのであつて、前者の場合はこれまでしばしば指摘した通り、「多様性の統一」であるのに対して、後者の場合は「一様性の統一」とでも云うべきものである。前者には「統合、綜合」があるが、後者には「統合」又は「綜合」と云うことが無い。前者が全面的、客観的、多元的統一主義であるとすれば、後者は片面的、主観的、一元論的統一主義であつて、独断的、教義的^{ドグマ}な極性志向の思惟の絶対主義である。云わば縦は在るが横がない抽象的、観念的統一主義である。従つてヘブル思想において統一主義と云う意味でのユニヴァーサルイズムは括弧^{かっこ}附きの又は但し書き付きの統一主義である。ヤコブ・フロムマーが、タルムード（ユダヤ教典）の本質的特徴に就て、それを統一的^{einheitliche}世界観（*Weltanschauung*）と云つた場合も、その「統一的」と云うのは、思惟と行動の絶対主義、或は広い意味での「從属性の欠如」と結び付いた統一主義と云う意味であつた。統一主義に就ての考え方それ自体が日本思想やギリシャ思想とは全く、意味内容を異にすることに注意しなければならない。

これまでしばしば指摘して来た通り、ヘブル思想における統一主義と云うのは、中庸を缺き、センターのない反社会的、反共同体的要素を持つ統一主義であつて、分立割拠、セクト主義のパティキュリズムと不可分に結合していることに注意しなければならない。日本思想におけるような家族主義的、生命共同体的有機的統一と云う思想はない。

(イ) 分立主義、宗派主義

(a) アアロンの黄金の櫃の伝承

此の意味でのパティキュリズム↓分立主義、割拠主義、宗派主義や派閥主義、セクシヨナリズムは、ユダヤ民族史

の冒頭から始まっている。即ち、アアロンの黄金の犢の伝承（モーセのトーラ第一書、出埃及記、第三十二章一―六に表明されてゐる）。（Martin Luther, Die Bibel oder ganze heilige Schrift des Alten und Neuen Testament, Berlin 1931. 2. Mose, Das 32 Kapitel. 1―6）

モーセが山からなか／＼歸つて来ないので、民衆がアアロンにこう言つた。

“Auf und machen uns Götter, die von und hergeben!”（起ちて我らを先導する神々を造れ!）と。

そこでヘブルの會衆は「神」（God）と云う言葉ではなくて「神々」（die Götter）と云う言葉を使つてゐる。この「神々」と云う言葉それ自体が、モーセの一神教に違反してゐる。モーセのトーラの律法（ハラカ又はハラコト（複数））の根本規範、憲制中の憲制↓一なる妬む神の教義、他神崇拜、偶像崇拜の禁止に違反してゐたわけである。

アアロンはこの民衆の要求に應じて、民衆の金の耳飾りなどを集めて、黄金の犢（das goldene kalb）を幾つか鑄造して与えた。民衆はそれをエジプトからの導きの神々と云つた。それを見たアアロンは祭壇を築き、明日は主の酬恩祭だと呼ばらわせた。翌朝燔祭を捧げ感謝の供物をし、民衆は座して喰ひ起きて踊つた、と云う伝承である。このトーラの伝承は何を物語つてゐるだろうか？

それはモーセの盟友アアロンでさえも、荒れ騒ぐ會衆の要求に屈服して統制ができないで、モーセの憲法の憲法と云ふべき一神教、他神崇拜、偶像崇拜の禁止違反、石撃ちの極刑に該當する「悪しき行為」を制止することができなかった、と云うことを意味してゐる。又、それは理に走つて情に乏しく、恩議を受けた同胞のリーダーに対しても報恩感謝のまごころのないヘブルの民の心、裏切り、叛乱（Rebel）を意味してゐる。

山から歸つて来たモーセは、事の次第をアアロンから聞き、主なる神ヤハウェをして「こわうなじの強き民なり」と

云わしめ、慨嘆し激怒している。當然に神罰の制裁を免かれない。モーセに付き従うレビ人なる祭司たち（中心的支配の部族）が叛徒を二千人殺したと、モーセのトーラ（旧約聖書のモーセの五書）の歴史物語アアガッダア Aagadden は伝えている。この伝承は歴史的事実であろうが、何を意味しているだろうか？

よく考えてみると、それは次のような種々の深い意味↓へブルの特殊のパティキュリズムを表明しているように思われる。それはどういうことであるか？何の變化・変哲も無いシナイの曠野・岩山の砂漠の遊牧民の、變化を欲求する心、分裂、叛乱、蜂起、革命、いわゆる革命的ユダヤ人↓政治的ラディカリズム（急進主義、過激主義）、知に走つて情に缺け、理に失して愛に乏しい主知主義と合理主義、寛容さに缺け、馬鹿の真似ができない偏狭な個別主義、割拠分立主義↓パティキュリズムを意味している。それは政治的には、権威主義ではなくて権力主義、王道主義ではなくて覇王主義、超越的絶対的世襲君主制ではなくて、階級的、相対的選定君主制となつて現われている。

要するに、力 (Maecht) と理知 (Vernunft) そして金 (Geld) の哲学しか通用しない人民又は民族 (People, Volk) だということの意味してしよう。

b) 分立割拠、内訌叛乱の歴史

アアロンの黄金の犢に表明された前述の思想は、分立割拠、内訌や叛乱の歴史となつて現われている。

モーセにさえ歸服せず叛乱を起したへブル人の君主に対するロイヤリティ（忠誠）の念は紙よりも薄く、初代のサウル王は息子のヨナタンと共にギルボアの戦いで親子もろとも戦死したが、祭司たちも人民も、弊履のように捨て、顧みなかっただろう。バイブルはサウル王が兇暴になりヨナタンの親友のダヴィデを殺そうとしたので、祭司たちの心もサ

ウルから離れたと記録している。『ギルボアの山よ、勇士の上に雨降らすことなかれ』と云うダヴィデの親友ヨナタンを想う歌が残っているのみである。

ダヴィデが王となった時代は、古代ユダヤ王制國家において最も繁榮した時代で、ダヴィデの功業を想う頌歌、讃歌が記録されているが、ヘブル人にとっては、眞の永遠の國君は神ヤハウェのみであるから、ダヴィデと雖も民より（ユダ部族）よりサムエルに選定されて王となったプリンケプス（Princes）的、カリスマ的支配者（神の恩寵による人民のリーダー）にとどまり、バビロニアのハムムラビ王のような現神王、日本の現人神としての君主のような絶対的權威を持つ君主ではなかった。この名君と云うべきダヴィデの後継者は二代目のソロモン王までであつて三代とは続かなかった。周知の通り、ダヴィデ、ソロモンの古代王制國家は、逆臣を始祖とする北イスラエル王国（現在のパレスチナの北部地方）と南ユダ王国とに分裂した。そして北イスラエル王国の如きは、逆臣相次ぐ陰慘な王制を記録している。まさしくモナルコマツヘン（Monarchomahen）（君主放伐）相次ぐ王朝であつた。理知と力の哲学しか通用しない能力主義の選定君主制の弊害が最も顯著に表明されている適例である。

ギリシャのマケドニア王系のシリア支配下の有名なマカベアの叛乱（シリアのヘレナイズ化―希臘化政策に対するマカベア一族の反シリア護教独立運動に就て見ても、想像も及ばない同胞相喰み兄弟垣にせめぐ派閥抗争、セクト主義の見本のようなものを示しており、まさしく内訌は外患を生む典型的な史実が見受けられる。（フラヴィウス・ヨヤフス著、新見宏訳、ユダヤ戦記、I、山本書店、東京、三十六頁以下）

マカベアの叛乱は成功し、マカベアが属するハスモニアン家（Hasmonean）の王朝が結果されたが、早くもローマの支配下に置かれ、ハスモニア王家の家臣（宰相）のアンティパトロスの次子ヘロデス（Herodes B. C. 74?～B. C. 4）は

ローマの統領アントニウスによりユダヤ太守に任ぜられ王号を稱したが、アントニウスの失脚後はオクタ비아ヌス皇帝に取り入りヘレニズムに心酔しマカベアの反ヘレニズムに叛旗を歸えた。ヘロデス大王の息子ヘロデス・アンティパス (Herod Antipas B. C. 4〜A. D. 39) はガリレーの太守にとどまり、彼の姪の後妻の子ヘロデス・アグリッパ (Herod Agrippa I. B. C. 10?〜A. D. 44) がユダヤ王になった。それも二代目で終り、ローマ総督の支配に代った。メシア・イエスが活躍したのは、ヘロデ大王後の不安と動揺の時代でありヨハネも殺されペテロも捕われの身になった。内訌は外患を生み、能力本位の選定王制の脆弱さが如実に表明されている。日本思想における君、君たらずとも臣、臣たらずるべからず、義は君臣、情は父子と云う超越的・絶対的唯一的仁愛統治として一君万民の民愛 (デモフィロ Demophilos) 主義の思想はヘブル思想には無い。

(ハ) 批判と闘争の宗教

— 宗教戦争の歴史

ヘブル思想に特有な分立・割拠のパティキュラリズムは、宗教の領域においては、分派は分派を産む宗派主義、セクト主義として現われている。揚句の果は流血の宗教戦争の歴史を記録している。ユダヤ教そしてその二人の娘の宗教クリスト教とイスラム教 (基督教と回教) は、『批判と闘争 (Kritik und Kampf)』の宗教であつたし、其の一神教、排他独善として極性 (Polarität) 志向の宗教的絶対主義が宗教戦争の悲劇をもたらしたのである。

モーセの一神教、ヤハウェイズム (Jahweismus) を継承したネヘミアとエズラのユダヤ教 (Judaism) は、ヘルシア支配下の時代の大宗教会議 (Große Synode) から、ギリシャ時代に始まるシネードリウム (Synedrium, Sanhadrin)

(最高評議会、最高会議、最高裁判所)の時代に這入ったが、既に指摘して置いた通り(ヘブル思想とコスモポリタニズム ユダヤ思想の研究 No.7、福岡大学法学論叢、第四十六巻第一号、平成十三年、六月、八八(六)―八九(七))次の三つのセクトに分れた。其の一はアムハアレツ Amharez であり、朝夕の祈りさえせず祈祷文書を入れた羊皮の小箱さえ持たない、ギリシアかぶれの非ユダヤ的ユダヤ人であり、其の二はサドカイ人 (Sadukai) と称されたセクトであり、要するに支配権力との妥協的保守派であった。其の三はパリサイ人 (Pharisee) と呼ばれた宗派であり、律法厳守の保守正統派であった。この三つのセクトはローマ時代に及んでおる。サドカイ人の宗派にせよパリサイ人の宗派にせよユダヤ教徒たちは、律法学者と云われたエスラと同様に、ドグマ (dogma) ↓教義に執したタルムーディスト (Talmudist) であり、神学的理の宗教に偏って宗教の眞髓―信仰から逸れていた。特に、ヘレニストのユダヤ系ヘロデス大王の死後の反動の時代は、不安と動揺の時代であり新興宗教が簇出しイエスの宗教もその一つであった。頭角を現わして来たイエスの愛の普遍教 (Universal Religion) は、既成のユダヤ教の世俗化した理の宗教と衝突し、イエスが彼らと戦い謀殺されたことは周知の通りである。ユダヤ教は批判と闘争の宗教と云われて来たが、その娘の宗教であるクリスト教(メシア教)も亦そうであって、イエス自身が自分は平和の為にこの世に来れる者に非ず、戦わんが為に来たのであると言ったと伝えられている通り(新約、ヨハネ伝福音書)、彼の宗教も亦モーセの一神教を承継した批判と闘争の宗教であった。そのことはパリサイ人の宗派との論戦に示されている。ゼケニム(長老)とかチャカニム(賢人)と云われたパリサイ人との論戦に彼岸の世界のメシア王を以て任ずる無学のイエスが太刀打ちできなかったであろうことは、彼自身が承知していたことであろうから、死を覺悟して闘い信念を曲げないで「我が事終りぬ」という最後の言葉を残し、散り果てたわけである。ヨハネもその後殺されている。

イエスのキリスト教（メシア教）は、ローマの下層階級を捉え、上層階級に拡がって公認教となり、西ローマ帝国滅亡後、ゲルマン国家群を思想的に征服してから後に於ても、分立分裂を重ね宗派主義に陥っている。周知の通り、カトリック（旧教）とプロテスタント（新教）の二派に分れて争ったし、新教徒に就て見ても、カルヴァン派のピュリタン（清教徒）あり、ルター派の福音教会派あり、独立教会派あり組合教派あり、統一教会派あり、救世軍あり、ロシア正教もあればギリシア正教もありと云った状態であつて、分裂は分裂を生むへブル特有のパティキュリズムを表明している。

そしてこの批判と闘争の寛容性に乏しい一神教は、宗派主義のトラブルが嵩じて層々宗教戦争を結果している。例えばローマ法王を中心とするフランスのカトリックとイギリスのプロテスタントとの百年戦争（1335～1453）、中欧ドイツにおけるカトリックとプロテスタントとの三十年戦争（1618～1648）を記録している。それだけではない。ユダヤ教の二人の娘の宗教であるイエスのキリスト教とホメットのイスラム教との一神教同士の十字軍の戦争（東ローマ帝国の救援と聖地奪還を目指すローマ法王をリーダーとする西欧のキリスト教・ゲルマン国家群の聯合軍とホメット教徒のトルコにエジプトも加わった宗教戦争）は、驚くなかれ実に約百九十五年の長期戦を記録している。結局この十字軍の戦いは失敗に終り、東ローマ帝国は滅亡した。東洋史、日本史にこのような百年戦争とか三十年戦争、そして十字軍のよう百九十五年に及ぶ宗教戦争が在っただろうか？勿論無い。我が国に就ては、宗教戦争と云えば、徳川時代初期の天草の乱ぐらいのもので、それも所謂「切支丹」が絡んだ領主の圧迫に対する百姓一揆的性質のものであつただろう。ちなみに天草四郎時貞は十六才の少年であつたのである。孔子の儒教はハイレベルの天下国家の倫理学のようなものであつたし、釋迦の佛教も人生哲学のようなものであつたし、何れも多神教、汎神論の立場であつたから、日本の神社神

道（多神教、神人融合の原始的民族的公教）と矛盾なく融合して（万教歸一）、日本の精神文化を世界随一のハイレベルに高めた。西洋のクリスト・ゲルマン國家群のような流血の宗教戦争などは曾って一度も無かった。平和は戦争の休息期間と云う言葉は、西洋諸国に就てのことであつて、日本では全く當嵌まらない。

ヨーロッパの大平原においてクリスト・ゲルマン國家群が戦争に続く戦争、まことに息の長い宗教戦争を行ったことに就ては、八本足の馬に跨り手に槍を持ち二匹の狼を従えた最高の神ウオーデン（Woden）又はオディン（Odin）に象徴されている、力、Machtの哲学と、蛇と星が象徴するユダヤの一なる妬む神ヤハウェ Jahwe（クリスト教では、エホバ、マホメット教ではアラ―）とが結合したこと、あたかも銃剣とコーラン、公権力と偏狭な一神教（主観的個人主義的宗教）が、イエスの政教分離の教義に違反して癒着したことによる。

マルクスの唯物論的一神教も亦、ユダヤの一神教の血をひいていたのであつて、そのことはすでに指摘して置いたから繰り返さない。ユダヤ教及びクリスト教の極性志向の主観的宗教的絶対主義は継承されており、宗派は宗派を産む分裂現象が顕著に現われている。穩健派から過激派までいろいろあつた。共産党に就ても、レーニン（本名ウルヤノフ（W. I. Ulianov）の率いるボルシェヴィキー（Bolschewiki 多数派の意）とメンシェヴィキー（Menschewiki 少数派）の対立があり、トロツキー（Trotski）はロシア革命に大いに貢献したにも拘らず疎外されアメリカに亡命して暗殺されている。（裏切られた革命 “betrayed Revolution” というパンフレットを書き残している。）

戦後の新日本ではダグラス・マックアーサーの『精神革命』、容共的占領政策の庇護の傘の下でマルキストが大いに羽根を伸ばし荒れ騒いだことは周知の通りである。共産党あり社会民主党あり、民主社会党あり、社民連あり、共産党に就て見ても、代々木派あり反代々木派あり、後者＝過激派に就て見ても革マル派、中核派、反帝派、赤軍派と花盛りで

あつて国賊の役割を果し日本国の崩壊に貢献した。

（ロ）一元論的統一主義

分立割拠主義、宗派主義、セクト主義と云う意味でのパティキュラリズムに対してユニヴァーサルイズムと云うのは、前述の通り括弧付き但し書付きの統一主義であつて、この意味でのユニヴァーサルイズムを的確に表現し得る適當な用語を見出すのは難しい。

イギリスは正式にはユナイティッド・キングダム United Kingdom 畧して U.K. と云い、アメリカもユナイティッド・ステイト・オブ・アメリカ (United State of America. U.S.A) と稱しているが、そこでユナイティッド United と云う言葉は、一つのものに結合する、と云う意味である。その前提には當然に多なるものが存在する。U.S. の場合には、大ブリテンと小ブリテン島を初めとしてカナダやオーストラリア、ニュージーランド等の曾つてのイギリスの植民地が独立してからクラウンの下で結合した U.S. であり、U.S.A. の場合はイギリスの植民地であつた北アメリカ各州が結合した聯邦国家である。そういう場合でのユニヴァーサルイズムは、政治的な意味での統一主義を意味する。又統一教會と云う場合は、組合クリスト教會と福音改革教會との統一によつて形成された（一九五七年）教會を指称するし、ユニタリアン (unitarian) と云えば、三位一体説 (Trinity) を排斥するプロテスタントの一派・唯一神教説を意味し、何れも宗教的意味での統一主義 (Unitarism) を意味する。然し、ここで云うパティキュラリズムに対するユニヴァーサルイズムはそういう政治的意味の統一主義でもなければ、教會の統一や教義に就ての統一主義を意味しない。それでは、一体どういう意味での統一主義であるか？

これまで私がしばしば引用してきたヤコブ・フロムマー (Jacob Frommer) の *einheitliche Weltanschauung* (統一的な世界観) ということは、ギリシア的な「多様性」の統一ではなくて反対に「一様性」の統一とでも云うべき内容のものであるから、二元論的世界観、思惟の絶対主義であつたことに間違いない。そうするとそれは統一主義と云うよりも単一主義、單元主義とでも表現すべき意味内容のものであつた。従つて前述した政治的、宗教的ユニタリアニズムとは異なり、「統一」「統合」の無いユニヴァーサルズムを意味していたわけである。そこには個々のもの、個々の人又は事物を結合して一つの全体 a Whole を形成するという思想はない。そこには人、物、事の個々のもの、堆積、あたかもシナイの曠野、岩山の砂漠の散砂の堆積、↓砂丘のような算術的總計があるだけで、木材、石、煉瓦、鋼材や硝子等が結合された一軒の家のような全一、統合体はない。又、個々の人が結合され組織化され整序されその個性に応じて共同作用 *Zusammenwirkung* を營む有機的な統一体は存在しない。利益社会的な *gesellschaftliche* な結合であれ共同社会的な結合 *gemeinschaftliche* な結合であれ。そこに「結合」 *Beitritt* → *Bund* → *Vereinbarung* と云うものは存在しない。例えば、私的な利害の連帯で結合している私企業、金融機関のようなものであれ、家族、部族、民族↓それを根基とする国家であれ、すべて社会的、共同的なものは存在しない。

そうすると「個々のものを一つに結合する」と云う意味での「統一」 *Unitarism* とか「統合」 *Integration* を缺いたユニヴァーサルズム (*Universalism*) (↓単一主義、一元主義) だということになる。そのようなユニヴァーサルズムは反社会的、反共同主義的 *Anti-Soziale, Anti-Kommunistische* なエトワスと云うことになる。

そのエトワス *Etwas* とは何か? 何を意味するか?

（a）自然主義的ユニヴァーサルイズム

“社会”に対する概念は“自然”であるから、反社会的ユニヴァーサルイズムということは、先ず第一に自然主義的、唯物主義的一元論としてのユニヴァーサルイズムと云うことになる。例えば地球或は宇宙は自然の事物であり自然の世界であるから、自然主義、唯物主義、単一主義のユニヴァーサルイズムは、グローヴァリズム globalism 或は世界主義と云うことになる。人、自然人、人類ももとより自然の子であるから、自然本位のユニヴァーサルイズムは、自然主義的普遍人類主義と云うことになる。然し人、自然人、人類は自然の子であるのみならず、周知の通り社会の子である。“人間”であり、結合と共同作用、その秩序付けられ組織化された有機的全体↓社会的生命共同体、とりわけ社会中の社会である國家の一員である。ヘブル人の場合はその共同体の一員としては、人にして人に非ざる人即ち非人、人間ではなくて物 Sache 即ち奴隸としてそこに嵌め込まれていた、國家を持ち国、民、nation になるに至ったがその古代ユダヤ王制國家も滅亡して再び奴隸に逆戻りしたし、亡国流転のユダヤ人となったことは周知の通りである。そこから、ヘブル人↓ユダヤ人の、我々も同じく“人間（↓社会人）”ではないか、人間なら人間として扱えと云う愁訴、要求が生じて来る。社会的不平等を批判、攻撃する人間性奪還の社会正義の要求、自由、平等の人間主義↓ヒューマニズム Humanismus が生ずる。又それを正當付ける理由として、我々ももともと／＼同じく自然の子であつたではないか、自然状態においてはお互いに自由、平等であつたではないかと云う自然主義的ヒューマニズムが主張される。自然主義と人間主義（ヒューマニズム）が結び付く。それは嫌悪され迫害されて来た人民の願望、欲求、要求、要するに客觀的に社会を見る眼のない、又そういう餘裕のない苦難の奴隸の民の嫉妬の心から発源した“叫び”（Ruf）であつたわけである。現実態↓社会状態

↓人の国において希望を失った人民の『声』(Vox populi)であったわけである。その民の声は神の声(Vox populi, Vox Dei)でもあった。

b) 一神教的ユニヴァーサルイズム

社会の子(↓人間↓人間関係↓社会的動物)としては非人間扱いされた艱難痛苦の被圧迫民族の精神は、社会の子を抜きにし、自然の子から一足跳びに神の子へ飛躍する。キヴィタス・テラ Civitas Yerra からキヴィタス・デイ Civitas Deiへ舞い上る。その神の国においては、万人が神の子であり(人間平等)、その中でヘブル人は神の選ばれた民、選民として特定され、その他の異邦人たち(ゴイム Goyim)は、この選民ヘブル人を通じて祝福される。従って等しく神の子である人民の中でヘブル人はその他の異邦人よりはランクが上であり、異邦人の王侯貴族等、すべておごりたがる者たちは選民ヘブル(イスラエル)の下位に位置付けられる。ヘブルの神ヤハウェ(イエスのメシア教のエホバ)が、最高絶対唯一の造物主としての神に祭り上げられたように、奴隷出自のヘブル人↓(ユダヤ人)がもろ／＼の世界の人民又は民族(People, Volk)の上にランクされ、ノモスのノモス(王の王)として桂冠されるということになる。かくして自然主義的ユニヴァーサルイズムは、一神教的ユニヴァーサルイズムと結合する。何れも奴隷の民、亡国の民の心性、心情↓嫉妬から発源したヘブル思想に特有な主観的、個別的、非現実的且つ反社会的な思想であって、理念(Idee)観念又は表象(Vorstellung)、理想、空想↓夢、要するにイデオロギー(広義、観念形態)であり、ユダヤ民族史を貫くメシア思想の現われと云い得られる。

我々はどうやらヘブル思想、ユダヤ的思考形式の終着駅に辿り着いたようである。予言者イザヤ(Isaia)が『我が

心を一ならしめよ！”と云った言葉に、ヘブルの思想又はユードンツームの本質的特徴が要約されているように思われるのであって、それは内的分裂に苦悩する者がそれを克服して統一と安息（心のやすらぎ）を得たいという願望、意欲のあらわれであつたと考えられる。エジプト、バビロニア、ギリシア、ローマ等の支配する異邦人（ゴイ）の思想の影響を受け、内的分裂、千々に乱れる心を克服して統一と安息を得ようという欲求の現われであることは云う迄もないが、その内部的統一の欲求は、ヘブル人の場合、“木を見て森を見ない”独断的、主観的、片面的な割り切り方、云わば十分な考究を怠り急ぎ過ぎた無理な断定になっている。従つて客観的な考察、全体的な眺望を缺き、整序と組織法に著るしく缺け、従つて總体的に見て種々の不合理、矛盾を犯し、コスモスではなくてカオス又はケイオス（渾沌）に陥つていると云つてよい。要するにヘブル思想におけるパティキュリズムとユニヴァーサルイズムとの関係は、一^a対一^bとの関係、二律背反的一元論であり、テーゼとアンティテーゼがあつてジンテーゼが無い、それがユダヤ的思考方法だと云うことになる。

（平成十五年三月十一日、A. D. 2003 Marz.）